

モンゴル語資料としての「清文鑑」

Characteristics of Written Mongolian in Polyglot Manchu Dictionaries of the Qing Dynasty, 18th Century

栗 林 均 (Hitoshi KURIBAYASHI) *

キーワード：18世紀、清朝、清文鑑、モンゴル語、満洲語、分類辞典

Keywords：18th century, the Qing dynasty, Manchu dictionaries, Mongolian

はじめに

18世紀の中国清朝では大規模な官製の満洲語辞典が相次いで編纂・刊行された。それらは「清文鑑」として知られているが、この名称はそうした各種の辞典につけられた *manju gisun i buleku bithe*（「満洲語の辞書」）という満洲語の表題の漢語訳に他ならない（注1）。

康熙 47（1708）年の序をもつ最初の「清文鑑」は、満洲語を満洲語で解説した語釈辞典であった。見出し語 12,110 項目は、意味によって天部、時令部、地部等々36の「部」と、その下位の280の「類」に分類・配列されている。これに続いて、康熙 56（1717）年には最初の清文鑑の満洲語の見出し語と語釈にモンゴル語の訳を併記した満蒙対訳の清文鑑が、そして乾隆 8（1743）年にはそのモンゴル語をすべて満洲文字で表記した満蒙清文鑑が刊行された。さらに乾隆帝の時代には、言語の種類と見出し語の数を増した清文鑑が次々に編纂された。それらは、満洲語と漢語の発音と語釈を含んだ満漢清文鑑をはじめとして、満洲語とモンゴル語と漢語のすべてに発音を付した満蒙漢 3 言語対訳清文鑑、満洲語・モンゴル語・漢語にチベット語を加えた「四体清文鑑」、それらにウイグル語を加えた 5 言語対訳の「五体清文鑑」等である（注2）。

このように「清文鑑」には編纂・刊行の年代も、対象とする言語の数と種類も、また収録語数や表記方法も異なる数種類の辞典が含まれる。今西[1966]は、主要な「御製清文鑑」を次の6種類にまとめて満洲語文献学の見地から詳しい解説を行っている。

- (1) 初次編刊の「御製清文鑑」
- (2) 第2次編刊の「御製満蒙合璧清文鑑」*
- (3) 第3次編刊の『御製増訂清文鑑』
- (4) 第4次編刊の『御製満珠蒙古漢字三合切音清文鑑』*
- (5) 第5次編刊の『御製四体清文鑑』*

* 東北大学東北アジア研究センター

(6) 第6次編集の『御製五体清文鑑』*

これに加えて、今西[1966: 133-134]は「乾隆年刊の満蒙合璧清文鑑」に言及している。これは、同論文では書目による情報によって紹介しているが、その後京都大学文学部の蔵本を実見した上で、情報が同じ論文の追記[今西 1966: 163]に補足されている。

本稿では、モンゴル語研究の観点から、上記(1)～(6)の清文鑑に「乾隆年刊の満蒙合璧清文鑑」を加えて、それらのモンゴル語の特徴と資料的な位置づけを検討する。7種類の清文鑑のうち、モンゴル語が含まれているのは、*印を付した第2次の「満蒙合璧清文鑑」と、第4次以降の「三体」「四体」「五体」の清文鑑、および「乾隆年刊の満蒙合璧清文鑑」である。モンゴル語資料としてはこれらの清文鑑を中心に検討するが、モンゴル語を含まない(1)「御製清文鑑」と(3)『御製増訂清文鑑』については、それぞれその後の清文鑑のあり方を決定する影響を及ぼしていることから、その他の清文鑑との関係という見地から取り上げる(注3)。

これら7種類の清文鑑は、いずれも御製つまり皇帝(の命)によって編纂されたものであること、見出し語が意味によって分類・配列された分類辞典であること、そして満洲語を基盤としているという点で共通している。

1. 「御製清文鑑」

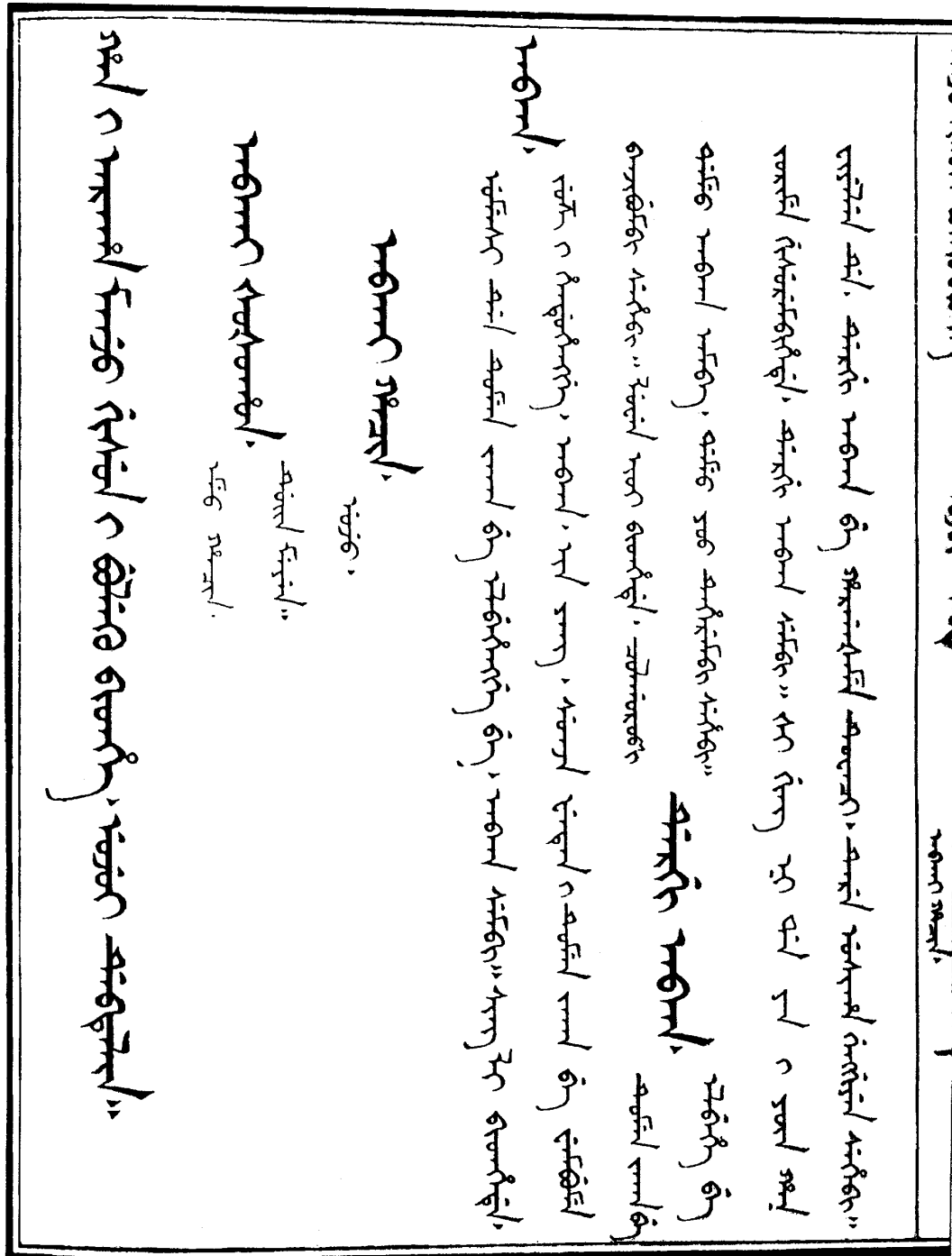
最初に刊行された清文鑑は、満洲語で *han i araha manju gisun i buleku bithe* (皇帝の作った満洲語の辞書)と題され、康熙47(1708)年の序が付されている。漢文の題名はないが、満洲語の題名の漢語訳である「御製清文鑑」の名称で通行している。初めから終わりまで、すべて満洲語だけで記されており、モンゴル語は一切含まれていないが、モンゴル語が含まれるその後の清文鑑の基礎となったもので、ここではその構成と形式を確認しておきたい。

本清文鑑は全26巻から成る。その内訳は、「序(sioi)」と「目録(šošo^hon hacin)」の不分1巻、本文20巻、「総綱(uheri hešen)」と呼ばれる満洲語の字母順の索引4巻、「後序(amargi sioi)」1巻、である。巻頭の「序」は康熙帝の御製で、「目録」は収録語が分類されている36部280類の一覧であり、目次にあたる。「後序」(跋)は2編あり、前の跋の末尾には武英殿大学士兼戸部尚書マチ(Maci)をはじめとする12人の参修官員の名を連ね、後の跋の末尾には経筵講官・吏部尚書マルガン(Margan)をはじめとする56人の官員の名を記している。

本清文鑑に収録されている見出し語は、12,110項目におよぶ。すべての見出し語は意味によって36部280類に分類され、満洲語による語釈と、経書等の満洲語訳書からとった例が付されている。

図1. は「御製清文鑑」の本文第1巻第1丁表の影印である。満洲語の本文の見出し語は、語釈の部分の2行中央に一回り大きい太字で印刷され、細字の語釈の行は、1頁あたり12行が配置されている。

図1. 「御製清文鑑」本文第1巻第1丁表



「天理図書館所蔵満語文献集 語学編」(マイクロフィルム、雄松堂、1966) より

図1. の満洲語のローマ字転写と逐語和訳を次に示す。

han i araha manju gisun i buleku bithe, ujui debtelin.

皇帝の 作った 満洲 語 の 辞 書 第1の 冊

abkai šošohon, emu hacin,
duin meyen.
天 の 部 一類 四則
abkai hacin, uju,
天 の 類 第一

umesi den tumen jaka be elbehengge be, abka sembi. sing li bithede,
abka : 極めて 高い 万 (の) 物 を 覆ったもの を 天 と言う。『性理』の書に、

天: judzi i henduhengge, abka, in yang, sunja feten i tumen jaka be wemburne
朱子の 曰く、 「天、陰 陽、五 行により 万 物 を 化

banjibumbi sehebi. luwen ioi bithede, colgoropi tumen jaka be
生せしめる」と言った。『論語』の書に「抜きん出て、 万 (の) 物 を

damu abka amba, damu yoo teherembi sehebi. 上天: elbehe be
ただ 天は 大、 ただ 堯は相応しい」と言った。 覆ったもの を

yorime gisurembihede, dergi abka sembi. ši ging ni da ya i yun han
指して 言う なら、 上 天 と言う。『詩経』の 大 雅 の 雲 漢

fiyelen de dergi abka be hargašame tuwaci, tere usiha genggiyen sehebi.
篇 に 「上 天 を 仰ぎ 見れば、その 星が 輝いている」と言った。

最初の清文鑑で確立された36部280類の分類体系は、語彙分類の規範として基本的にその後の清文鑑に継承され、またそこに採録された12,110の見出し語は、その後の清文鑑で一部改訂されて別の語に置き換えられたが、大半はそのまま引き継がれた。後続の清文鑑は、本清文鑑の語彙分類の方式と語彙項目を継承し、それらを改訂・増補することによって成立していると言うことができる。春花[2007]によれば、本清文鑑で採用された語彙の分類体系は宋の太宗の勅撰になる類書『太平御覧』の分類方式に範を取ったものであるという。

本清文鑑の影印資料としては、次のものが公刊されている。

- ・『御製清文鑑』（マイクロフィルム）「天理図書館所蔵満語文献集 語学編」、雄松堂、1966。

これには、次の落丁がある：第8巻末の3丁（第38丁・第39丁・第40丁）が欠落している。

- ・『御製清文鑑（上）』（阿爾泰語資料集 第3輯）暁星女子大学出版部、1978。

これは、御製序・目録・本文の影印である。目録と、本文の6丁までの見出し語に手書きで漢語訳の書き込みがある。

- ・『御製清文鑑索引（下）』（阿爾泰語資料集 第4輯）暁星女子大学出版部、1982。

後序（跋）と総綱の影印の後に、成百仁氏の韓国語の解題、および満洲語ローマ字転写形の索引が付いている。

2. 「御製滿蒙文鑑」(「御製滿蒙合璧清文鑑」)

二番目に刊行された清文鑑は、康熙 56 (1717) 年の序が付されている満洲語とモンゴル語の対訳辞典である。満洲語の題名は最初の清文鑑と同じ (han i araha manju gisun i buleku bithe) で、モンゴル語の題名は満洲語の逐語訳 qayan-u biči-gsen manju ügen-ü toli bičig (「皇帝の書いた満洲語の辞書」) である。漢文の題名は無く、満洲語とモンゴル語の題名を漢語訳すれば最初の清文鑑と同じ(「御製清文鑑」)にならざるを得ないが、その内容から「御製滿蒙文鑑」(あるいは「御製滿蒙合璧清文鑑」)のように呼ぶことができる。このほか、最初の清文鑑と区別するために「清文合蒙古鑑」「蒙古清文鑑」等の名で言及されてきた(注4)。

満洲語の題名が最初の清文鑑と同じというのは、この清文鑑の特殊な編纂様式を如実に示している。つまり、最初の清文鑑の見出し語も語釈も、もとの満洲語の一字一句をすべてモンゴル語に逐語訳して満洲語の行の傍らに対応するモンゴル語の行を並べてできているのがこの清文鑑である。換言すれば、本清文鑑は最初の清文鑑に「完全なモンゴル語訳」を併記したものである。

このような清文鑑を編纂した目的と次第について、編者序には次のように記されている。

...「また、モンゴルの書およびモンゴルの言葉の功益は重要である。八旗のモンゴル人らはモンゴルの言葉およびモンゴルの書を学び読むことが少なくなった。このようにして年を経れば、誤り残すことになる。老人たちがいなくなれば、調べ尋ねることが困難となる。この時機に明らかにして究めなければ、後世で正し直すことは極めて難くなる」と、聖主が聡明に見通されて諭旨を下し、「清文鑑をモンゴルの言葉に訳せ。満洲とモンゴルの言葉を併せてひとつの側に満洲文字で、ひとつの側にモンゴル文字で書け。下の説明の言葉もまたこのように書け。経書より引いた言葉はすべて捨てよ。もし汝らの知らない微細で重要な言葉があれば、満洲の書を作った時のように八旗の古老や物知りのモンゴル人たちに尋ねて書け。翻訳し終わった数頁の見本を作って示し上奏せよ。朕が教示しよう。」と仰せになられたことに謹んで従い、御製清文鑑を臣我らが謹んで詳らかに見たところ、... 全て 280 の類に分け、21 の巻として編まれていた。この書には、類を合わせて収録しなかったものはない。その思いは極めて奥深く、繊細である。これを普通の書を翻訳するのと同様に翻訳することはできない。必ずや一語一字といえどもその意味を合わせて訳すべくして臣我らの学んだことは足らず、考えは狭く、見て知ったことは浅く、実に範として出してモンゴル語に訳すことはできない。臣我らは八旗の古老、および年頭の礼に来貢した四十九旗のジャサグのモンゴル人ら、および五十七旗のハルハのジャサグのモンゴルのワン、ペイル、ペイセ、グン、タイジらに我らの耳にしない知らない語を明らかにし、調べ、尋ねて翻訳した。また我らの耳にしない知らないモンゴルの言葉を聖主が教示し翻訳したことにより、成就した... (2b-5b)

これによれば、康熙帝がモンゴル語を記録しておく必要性を重視して清文鑑をモンゴル語に訳すようにと命じただけでなく、その形式についても満洲語とモンゴル語を1行ごとに並べ、語釈中の

経書からの例は削除するようにと具体的な指示を行ない、それを受けて編者らが一字一句厳密に訳したという。

図2. は「御製満蒙清文鑑」の第1巻本文冒頭の影印であり、最初の清文鑑の図1. に対応する。満洲語とモンゴル語が逐語的に対応しており、語釈の部分にあった経書等の訳書からの例が省略されていることを見ることができる。

次は、図2. の満洲語とモンゴル語を対応させたローマ字転写と訳である（注5）。

han i araha manju gisun i buleku bithe, ujui debtelin.
qayan-u biči=gsen manju ügen-ü toli bičig, terigün debter.
皇帝 の 作った 満洲 語 の 辞 書 第1の 冊

abkai šošohon, emu hacin, duin meyen.

tngri-yin quriyangyui, basa tobčiy_a keme=müi. nige jüil, dörben anggi.
天 の 部 (また綱とも言う) 一 類 四 則

abkai hacin, uju.
tngri-yin jüil, terigün.
天 の 類 第一

abka : umesi den tumen jaka be elbehengge be, abka sembi.
tngri : masi öndür tümen yayum_a-yi bürkü=gsen-i inu, tngri keme=müi.
天 : 極めて 高い 万 (の) 物 を 覆ったものを 天 と言う。

dergi abka : tumen jaka be elbehe be jorime gisurembihede,
degedü tngri : tümen yayum_a-yi bürkü=gsen-i jiya=n kelelče-kü bögesü,
上 天 : 万 (の) 物 を 覆ったものを 指して 言う なら、

dergi abka sembi. niohon abka : abkai boco be jorime
degedü tngri keme=müi. köke tngri : tngri-yin öngge-yi jiya=n
上 天 と言う。 青 天 : 天 の 色 を 指して

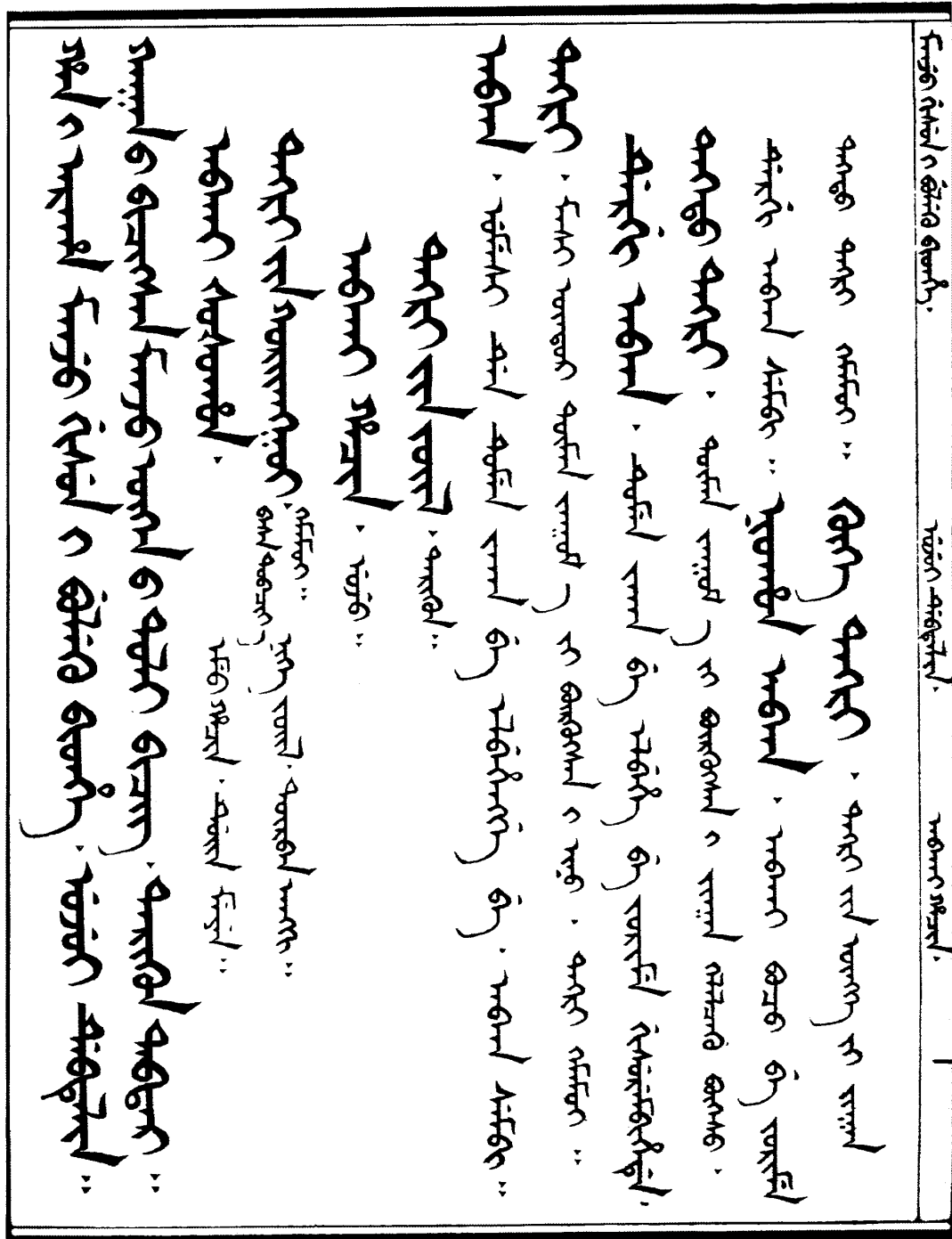
このように本文は1頁12行で、全巻にわたって満洲語とモンゴル語が1行おきに配置されている。

本清文鑑の内容は基本的に最初の清文鑑と同じであるが、形式上の相違点としては次の4点を指摘することができる。

第1は、本書にはモンゴル語翻訳編者の序（満洲語とモンゴル語併記）が新たに加わっている。上に引用した訳文はその一部であるが、これは康熙47年の御製序の後に置かれ、その末尾にはモンゴル語の翻訳を行った乾清門二等侍衛ラシ(Rasi)をはじめ18人の官員の名が列挙されている。

第2は、後序(跋)に関するもので、これは巻のまとめ方にも関連している。江桥[2001:157-158]および黄明信[1957:6-7]によれば、故宫博物院図書館所蔵本は全29巻で、正編(本文)20巻、総綱(索引)8巻、後序(跋)1巻から成る。最初の清文鑑では、御製序と目録が独立の不分1巻としてあったのに対し、ここではこれらは正編(本文)第1巻と分かたずにその巻頭に置かれている。また後序だけはモンゴル語の訳が無く、最初の清文鑑と同じものである(黄明信[1957:6-7])。

図2. 「御製満蒙清文鑑」本文第1巻第1丁表



「天理図書館所蔵満語文献集 語学編」(マイクロフィルム、雄松堂、1966)より

一方、今西 [1966 : 130-131] によれば、京都大学図書館所蔵本は全 29 巻と、巻数は故宫博物院図書館所蔵本と同じであるが、序と目録が独立した 1 巻、本文 20 巻、総綱 8 巻で、「この〔満蒙〕清文鑑に後序はない」としている。天理大学所蔵本〔マイクロフィルム版〕もこれとまったく同じ構成で、後序は存在しない。このように、最初の清文鑑の後序 2 編は編纂の初めから別の扱いとされてモンゴル語の訳が付されず、巻数から除外される扱いを受けたものと考えられる（注 6）。

第 3 は、最初の清文鑑の「総綱 (uheri hešen)」4 巻が、本書では 8 巻に倍増している。序・目録・本文と同様、「総綱」に関しても満洲語のすべての行にモンゴル語の訳文が付加され、行数・丁数が倍増したことに応じて巻数も倍に増えたものである。

第 4 は、編者の序にも示されているように、最初の清文鑑で語釈の後に加えられていた経書等の訳書から取った例が、本清文鑑ではすべて削除されている。元来の満洲語にモンゴル語の逐語訳が行ごとに加われば、本文の分量は倍増するはずであるが、これらの例を省略したことによって本文の巻数は最初の清文鑑と同じ 20 巻に収まっている。

本清文鑑のモンゴル語の資料的な性格としては、次の点を指摘することができる。

まず、ここに記されているモンゴル語は、18 世紀初頭の書き言葉として、記録された時代が特定される資料である。本清文鑑の後に編纂された三体、四体、五体の清文鑑をみると、満洲語もモンゴル語も、先行する清文鑑の見出し語がそのままの形で引き継がれているものが少なくない。その点、本清文鑑のモンゴル語は、見出し語も語釈もすべてこれを編纂する際に新たに記録された資料として扱うことができる。一般に、記録されている語形が先行する文献から引用されたものか否かといった区別は、特に口語形の露出などを扱う場合には重要である。










次に、本清文鑑は、清朝の皇帝（の命）によって編纂された官製の辞書であることから、そこに記されているモンゴル語は、字形・正書法・語法すべての面で清朝の官吏が規範として示そうとした書き言葉とみなすことができる。






さらに、収録されている単語が量的に豊富で、多様である点は注目に値する。見出し語の数は 12,110 項目で、それらのすべてにモンゴル語で語釈が付されている。辞典としての性格上、その見出し語は基本的に異なる語である（注 7）。見出し語だけをみても、これだけの分量と種類のモンゴル語の単語を収録した資料は稀であり、さらにモンゴル語をモンゴル語で解説したジャンルは、同時代およびそれ以前に類を見ない。

また、ひとつひとつの語や表現が満洲語と正確に対応しており、意味が明瞭である点も特徴的である。見出し語も語釈も満洲語からの逐語的な翻訳であり、個々の単語や表現の意味に関してはすべて対応する満洲語を参照することができる。



本清文鑑に記されているモンゴル語の特徴を見ると、基本的には「古典式モンゴル文語」（注 8）の規範に準じていると見なすことができる。





モンゴル文字の字形では、語頭の \uparrow (titim)、語末の \downarrow (orkiča)、 ᠵ (čačuly_a)、 ᠭ (egsilge)






などの字体や、子音字 の末位形に ( でなく)  の字形が使われているなど、現代の内モンゴルで使われている活字体に近い(図2.を参照)。母音字の前に位置する子音字 <n> と <y> は、点を伴った字形 ( !  、   ) が使われ、子音字 <c> と <j> の中位形が  と  としで区別されている点も現代の内モンゴルの活字体と同様である (注9)。


一方、現在内モンゴルで使われている活字体と異なるのは、子音字 <y> の頭位形と中位形に先端にカギのない  の字形が使われていること、子音字 <p> に  ではなく  の字形が用いられていること、子音字 <s> の末位形に  と  の字形が用いられていること、などである。


上に述べたことと一部重複する点もあるが、本清文鑑におけるモンゴル文字の字形、正書法、語形が目立った特徴を以下に列挙しておく (注10)。







(1) 子音字 <s> の末位形として、単音節語では  が、多音節語では  の字形が用いられている。


単音節語 :  (qas 「玉 (ぎょく)」 14-73b8)、 (jes 「銅」 14-75b8)、 (bös 「布」 15-9a10)、 (bars 「虎」 19-102b12)、等。




多音節語 :  (qayas 「半分」 2-14b4)、 (ulus 「国」 13-28a8)、 (ečüs 「末尾」 17-47a12)、 (tenggiş 「湖」 1-78b8)、 (jimiş 「果実」 18-112b8)、等。



このような字形の書き分けは、本清文鑑独自の特徴であり、これ以降の清文鑑では、モンゴル文字の <s> の末位形にはすべて  の字形が使われている。






(2) 若干の語で子音字 <d> の頭位形に  の字形が用いられている。



例 :  (Döl 「(山の斜面で) 平坦な所」 1-67a2)、 (DeI 「鬘 (たてがみ)」 20-22a8)、 (Des 「次、副」 2-23b8)、 (Dam 「決心のつかない」 11-33a12)、 (Duu 「歌」 3-42a10)、 (Dalang 「(馬の) 鬘の生えるところ」 20-19a8)、等。






単音節語で子音字 <d> の末位形に  の字形が用いられているのは、古典式モンゴル文語および現代の内モンゴルの文語と同様である。

例 :  (ed 「財貨」 14-71a12)、 (qarD 「ギリッ (歯を噛む音)」 9-33b12)、 (DeD 「第二、副」 3-84b6)、等。

(3) 子音字 <p> に  の字形が用いられている。 の文字は用いられていない。

例 :  (püse 「商店」 14-22a2)、 (pei 「ペッ (嘲りつばを吐く音)」 10-42a8)、 (poi 「ポチャン (水に落ちる音)」 9-26a2)、 (pin 「嬪 (皇帝の側室)」 4-8a1)、 (pü' 「プッ (息を吹きつける音)」 9-31b4)、等。

(4) 外来語や擬音語・擬態語の中で <e> を表す  (末位形は ) の字形が用いられている。

例 :  (šEngsai 「生菜 (サラダ菜)」 18-18b4)、 (pingsE 「(多量の金銀を量る) 秤」 14-23a8)、 (pEng 「(草や筵の屋根だけで壁のない) 小屋」 20-55b10)、 (čEsE 「茄子」 18-16b6)、 (pEr pEr 「パタパタ (鳥やバッタなどが飛び立つ音)」 9-49a8)、等。

(5) モンゴル文語では、名詞の格語尾と再帰所属語尾、および一部の複数形語尾を除いて、ひとつの単語は一続きに書かれる。本清文鑑では、一つの単語であっても、子音字 <l> で終わる動詞

なく次のように **ᠠᠰᠠ**(+asa/+ese) という形 (語幹に連ねて書かれる) が見られる。

例: **ᠠᠭᠤᠷᠢᠳᠠᠰᠠ**(urid+asa 「以前から」 1-29b10)、**ᠨᠠᠳᠠᠰᠠ**(nad+asa 「私から」 12-39a4)、
ᠴᠢᠮᠠᠰᠠ(čim+asa 「汝から」 12-39b6)、**ᠮᠠᠨᠠᠰᠠ**(man+asa 「我々から」 12-40a6)、
ᠲᠠᠨᠠᠰᠠ(tan+asa 「汝らから」 12-40b10)、**ᠬᠡᠨᠡᠰᠡ**(ken+ese 「誰から」 12-42a8)、等。

(8) 動詞の過去形語尾に **ᠵᠢ**(=ji) **ᠴᠢ**(=či) という形が使われており、**ᠵᠠᠢ**(=jai/=jei) **ᠴᠠᠢ**(=čai/=čei) および **ᠵᠠᠭᠤᠢ**(=juqui) **ᠵᠠᠭᠤᠢ**(=jüki) **ᠴᠠᠭᠤᠢ**(=čuqui) **ᠴᠠᠭᠤᠢ**(=čüki) といった形は使われていない。

例: **ᠪᠣᠯᠠᠶᠠᠵᠢ**(bolya=ji 「為した」 2-51b6)、**ᠪᠣᠯᠪᠠᠰᠤᠷᠠᠵᠢ**(bolbasura=ji 「習熟した」 3-70a6)、
ᠲᠤᠭᠤᠯᠠᠵᠢ(tuyul=ji 「通曉した」 3-73a6)、**ᠣᠰᠤᠴᠢ**(ös=či 「成長した」 5-43b12)、等。

ところで、本清文鑑のモンゴル語はすべて満洲語の逐語訳であることから、その取り扱いには注意を要するところがある。その第1は、満洲語でひとつの見出し語に二つ以上の意味が説明されていて、モンゴル語でそれぞれの意味に対して別の語が対応している場合があることである。たとえば、次は、満洲語の **weihe** に対応するモンゴル語の説明であるが(5-57a)、前半は **sidü** (齒) の説明であり、後半の「また…」以降では、いきなり **eber** (角) の説明になっている。

sidü : aman-u dotuy_a_du ayurqai-dur nigen nigecken-iyer qada=n uryu=γsan yasun-i, sidü
 口の 中の 空洞 に 一つずつ くっついて生えた 骨 を **sidü** (齒)
keme=müi. basa görügesü, mal-un toluyai-dur qada=n uryu=γsan yasun-yi, eber keme=müi.
 と言う。 また 獣や 家畜 の 頭 に くっついて生えた 骨 を **eber** (角) と言う。

モンゴル語だけ見ては意味不明なこのような説明は、元の満洲語の語釈をみれば納得がいく。

weihe : anggai dorgi uman de emke emken i hadame banjiha giranggi be weihe sembi.
 口の 中の 空洞 に 一つずつ くっついて生えた 骨 を **weihe** と言う。
geli gurgu, ulha i uju de hadame banjiha giranggi be, inu weihe sembi.
 また 獣や家畜 の 頭 に くっついて生えた 骨 を 同じく **weihe** と言う。

すなわち、満洲語の **weihe** は「齒」と「角 (つの)」という二つの意味をもち、モンゴル語の説明はそれをそのまま逐語訳したものである。

もうひとつ例を挙げよう。次は満洲語の **da** に対応する説明であるが(2-40a)、モンゴル語の見出し語が **uy** でありながら、語釈の中に **alda**、**sumu** という別の語の説明が入っている。

uy : kereg-ün egüskel-i, uy keme=müi. basa aliba ündüsü eki-yi, mön uy keme=müi.
 こと の 始まり を **uy** と言う。 またなんらかの 根 元 を 同様に **uy** と言う。
basa qoyar yar sungya=ju nigente kemne=gsen-i inu, nige alda keme=müi.
 また 両 手を 伸ばして 一回 測ったものを、 — **alda** と言う。
basa jebe sumun-u jerge-yin yayuman-u nigen-i, nige sumu, qoyar-i, qoyar sumu
 また 矢 などの もの の 一つを、— **sumu**、二つを 二 **sumu**
keme=n kelelče=müi.
 と言う。

これも、元の満洲語 (da) に①源、根元 ②尋 (ひろ) ③ (矢) 一本の本、という 3 つの意味があり、それらをそのままモンゴル語に逐語訳したものが上の文章である。これをモンゴル語の解釈辞典として扱うためには、それぞれの語釈を切り離して扱う必要がある。

取り扱いに注意を要する第 2 の点は、「総綱」のあり方である。「総綱」は、すべての満洲語の単語を字母順に配列して、それが採録されている分類の項目を示した索引であるが、この部分にもモンゴル語の逐語訳が付されている。しかし、モンゴル語は、字母順に配列されていないために、モンゴル語の索引としては用を成さない。

図 3. は、その総綱第 1 巻第 2 丁裏の影印である。満洲語の単語が alimbi, ajabumbi, afabumbi, ... と、字母順に並べられて、それぞれ本文に載録されている分類の項目が示されている。満洲語の右脇のモンゴル語 (dayaya=mui, edü=müi, tusiyalya=mui, ...) は満洲語を逐語訳したものである。総綱の中から、モンゴル語の単語を見つけ出すには、対応する満洲語によって探す以外にない。

本清文鑑の影印資料として公開されているものとしては、次のものがある。

・『御製満蒙合璧清文鑑』(マイクロフィルム)「天理図書館所蔵満語文献集 語学編」雄松堂、1966.

これは第 10 巻の 60a-67a の 13 頁が白紙に覆われているほか、次の落丁・乱丁がある。

落丁：第 14 巻 19 丁 (19a-19b)、乱丁：第 18 巻の 73 丁と 76 丁の錯簡。

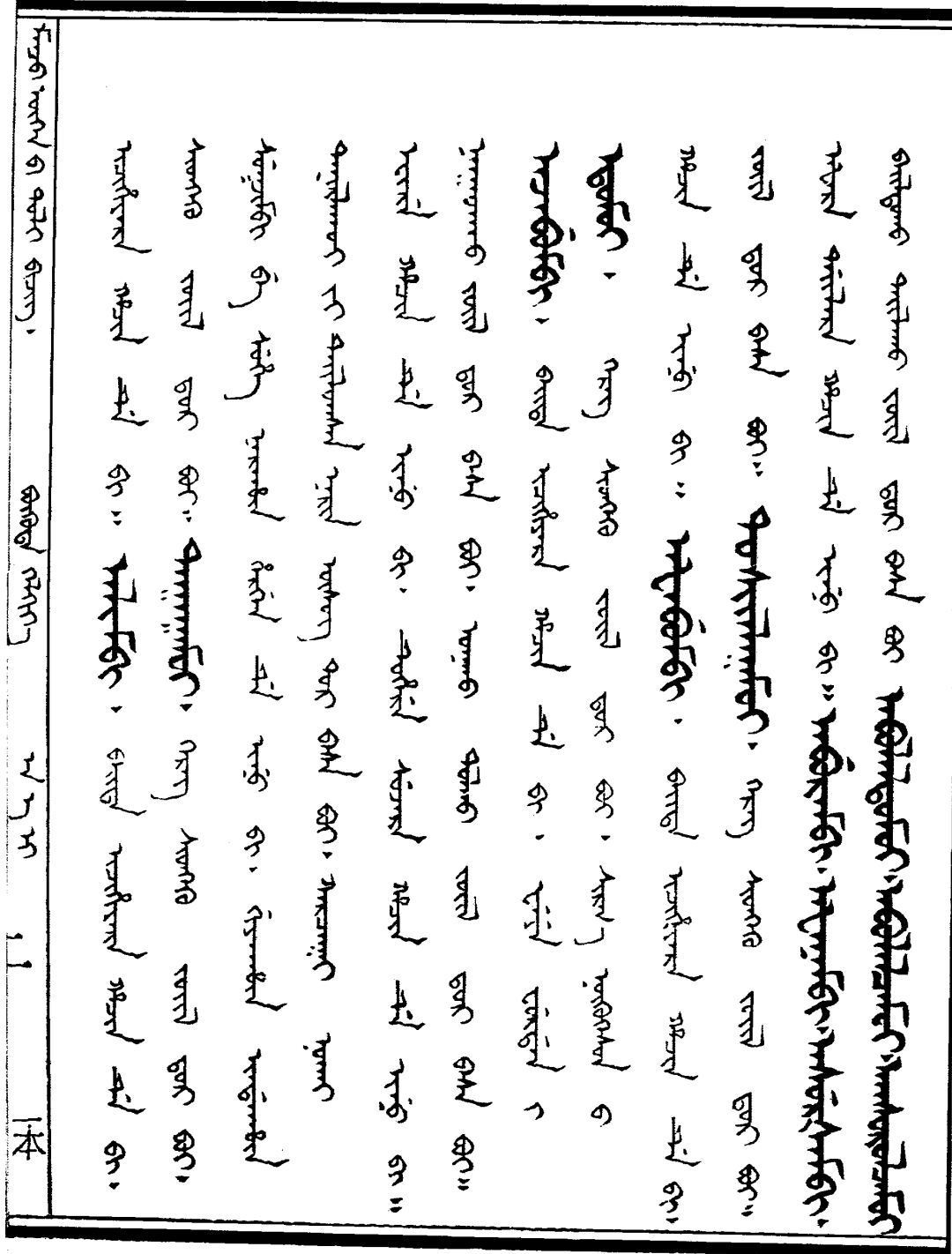
なお、『二十一卷本辞典』(ᠰᠣᠷᠢᠨ ᠨᠢᠭᠡᠲᠦ ᠲᠠᠶᠢᠯᠪᠦᠷᠢ ᠲᠣᠯᠢ qorin nigetü tayilburi toli) (内蒙古蒙古語文学歴史研究所編、内蒙古人民出版社、1977) は、本清文鑑からモンゴル語の見出し語と語釈を抽出して、モンゴル語の字母順に配列したものであるが、綴りを現代の規範的な正書法に直し語釈の一部を省略している。具体的には、与位格語尾の ᠳᠦᠷ(-dur/-dür), ᠲᠦᠷ(-tur/-tür)をすべて ᠳᠦ(-du/-dü), ᠲᠦ(-tu/-tü)に直し、人称所属の ᠶ᠋ᠨ(inu)を男性語の後で ᠶ᠋ᠨ(anu)と書き換えている。また、上述の sidü (齒) のような同音異義語の場合には、二番目以降の語義の説明を削除している。

3. 乾隆年刊の「御製満蒙文鑑」(「御製満蒙合璧清文鑑」)

乾隆 8 (1743) 年の序をもつ本清文鑑は、康熙 56 (1717) 年序の清文鑑の内容をそのまま継承しながら、モンゴル語をすべて満洲文字表記に置き換えることによって成っている。本清文鑑の御製序には、このような清文鑑を編纂する目的が次のように記されている：

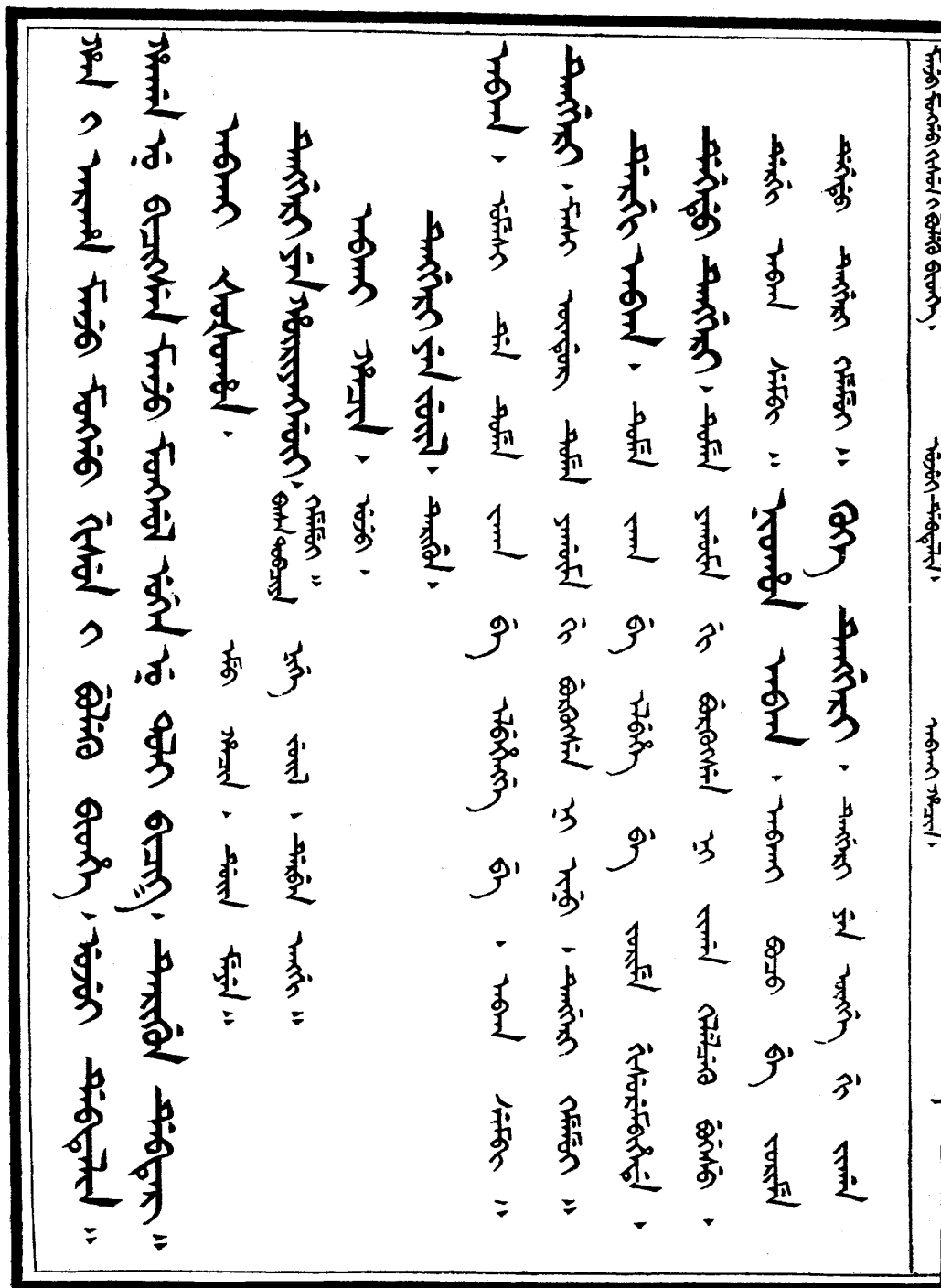
... モンゴル文字は字画はあるが、圈点が無いために、言葉を知らない者にとっては音にして読むことが難しく、初学者が音を連ねて読むことは容易にできない。今、八旗のモンゴル人たちの中に古の者たちは僅かとなった。もし今より明らかに定めておかなければ、日が経った後では益々間違いが起こり、本当の語音が得られなくなる。互いに間違ったことを模倣し、習いとして後の人々が学ぶ際に大いなる困難とならないようにと考え、ことさら大臣諸官に命じて満蒙語辞書[満蒙清文鑑]のモンゴル語をすべて満洲文字によって書かせ、改めて版を刻し、分かり易く読み易くした。(2a-3a)

図3. 「御製滿蒙文鑑」総綱第1巻第2丁裏



「天理図書館所蔵満語文献集 語学編」(マイクロフィルム、雄松堂、1966) より

図4. 乾隆年刊の「御製滿蒙清文鑑」本文第1巻第1丁表



内蒙古自治区図書館所蔵本

要するに、モンゴル文字は読み方にあいまい性があり、モンゴル語を知らないと読むこともできないことから、読み方にあいまい性のない満洲文字でモンゴル語を表記して読み方が分かるようにした、というものである。

このような編纂の目的を忠実に体现して、本清文鑑は康熙 56 (1717) 年序の清文鑑の満洲語をそのまま採録し、モンゴル語も字句を変えずにその表記だけをモンゴル文字から満洲文字に置き換えている。両者は、本文の内容は言うまでもなく、丁付け、頁内の行の配置、1 行あたりの語数もまったく同じである。図 4. は、図 2. に対応する頁（本文第 1 巻第 1 丁表）であるが、モンゴル語の表記がモンゴル文字から満洲文字になっているだけで、両者の行・語の配置はまったく同じであることが分かる。図 4. の偶数行に配置されているモンゴル語を、満洲語のローマ字転写方式に従って表記すれば、次のようになる。

hagan nu biciksen manju monggol ugen nu toli bicik, terigun debter.
皇帝 の 作った 満洲 モンゴル 語 の 辞 書 第 1 の 冊

tenggeri yen hūriyanggūi, ^{basa tobciya}
^{kememui.} **nige juil, derben anggi.**
天 の 部 (また綱とも言う) 一 類 四 則

tenggeri yen juil, terigun,
天 の 類 第一

tenggeri : masi ūndur tumen yagūma gi burkuksen ni inu, tenggeri kememui.
天 : 極めて 高い 万 (の) 物 を 覆ったものを 天 と言う。

degedu tenggeri : tumen yagūma gi burkuksen ni jigan kelelceku bugesu,
上 天 : 万 (の) 物 を 覆ったものを 指して 言う なら、

degedu tenggeri kememui. kuke tenggeri : tenggeri yen ūngge gi jigan
上 天 と言う。 青 天 : 天 の 色 を 指して

一方で、両清文鑑の間には、次のような形式上の違いがある。

第 1 に、本清文鑑の題名は、満洲語で *han i araha manju monggo gisun i buleku bithe* (皇帝の作った満洲、モンゴル語の辞書) となっており、康熙 56 (1717) 年序の清文鑑にはなかった *monggo* (「モンゴル」) の 1 語が追加されている。モンゴル語の題名は、*hagan nu biciksen manju monggol ugen nu toli bicik* であり、満洲語の逐語訳である。漢文の題名はない (注 11)。

第 2 に、本清文鑑には乾隆 8 (1743) 年の御製序と本清文鑑の編者等序が新たに加えられている。本文 20 巻の前に、序と目録からなる 1 巻が置かれており、その内容は、康熙 47 年御製序、本書御製序、康熙 56 年編者等序、本書編者等序、および目録となっている。

第 3 に、本清文鑑には総綱、後序が無い。したがって、全体は序と目録の不分 1 巻と本文 20 巻を合わせた 21 巻から成っている。春花 [2006 : 594] によれば、本清文鑑の総綱が后永瑤等の編により『御制滿蒙文鑑総綱』として乾隆 41 (1776) 年に刊行されている。それは、康熙 56 (1717)

年序の清文鑑の総綱とは異なり、満洲文字で表記されたモンゴル語の単語が満洲語の字母順（十二字頭順）に配列されているという。しかし、この総綱は本清文鑑が刊行されてから 30 年以上経った後で編纂されたものであり、本清文鑑とは別の書とみなすのが適当であろう（注 12）。

本清文鑑のモンゴル語資料としての価値は、モンゴル語が満洲文字で表記されていることによって、モンゴル文字では得られない情報が得られることにある。具体的には、モンゴル文字では子音字 <t> と <d>、子音字 <k> と <g>、語頭の子音字 <y> と <j>、語頭以外の母音字 <a> と <e> が同じ字形で書かれるのに対し、満洲文字ではこれらはそれぞれ別の字形で書き分けられているために、これらの文字の発音（読み方）を知ることができる。このように、文字の発音（読み方）にあいまい性の少ない満洲文字でモンゴル語が表記されていることによって、18 世紀中葉のモンゴル語の発音についての貴重な情報に接することができるが、満洲文字によるモンゴル語表記の性格とその制限について、十分に理解しておく必要がある。

まず、このモンゴル語表記は満洲文字の体系の中で、満洲文字の正書法規則に従って綴られており、満洲語に無い音は、（それに近い）いずれかの満洲文字に置き換えて表記されていると考えられる。したがって、モンゴル語にある音の違いが、満洲文字とその正書法の中では書き分けることができないために表記の上で区別されない場合もあり得る。たとえば、モンゴル語の母音は満洲文字の 6 種類の母音字によって表記されているが、これが当時のモンゴル語の母音体系をそのまま反映していると即断を下す前に、満洲文字に 6 種類の母音字しかないための表記の制限によるものではないかということは検討してみるに値する。また、当時のモンゴル語で短母音と長母音の対立があったとしても（これは大いに考えられることであるが）、満洲文字の正書法の中でそれらを書き分ける手段は極めて限られている（注 13）。こうした満洲文字の表記上の制限のためにモンゴル語の短母音と長母音の違いが表記に現れないという可能性は考慮しておく必要がある。

次に、満洲文字で表記しようとしたモンゴル語がどのようなものであったか、検討しておく必要がある。それは、おそらく当時の「口語の発音」をそのまま写そうとしたものではない。モンゴル文語では、現代モンゴル語の長母音に対応して、「母音字+子音字 <y, g> +母音字」という綴りが書かれることが多いが、この <y, g> に対応する子音は、パスパ文字や漢字で表記された 13～14 世紀の口語ではすでに存在していないにもかかわらず、18 世紀に属するこの文献では満洲文字の子音字 <g> が書かれている。このように、モンゴル語を表記している満洲文字は、多くの場合、モンゴル文字の一文字一文字に対応していることから、これは口語の音を表わそうとしたものではなく、モンゴル文語の綴りに合わせた読み方を示していると考えるのが妥当であろう。

モンゴル語を表記している満洲文字とモンゴル文字との対応という観点から、本清文鑑の満洲文字表記モンゴル語の目立った特徴を指摘すると、次のようになる。

- (1) 上述のように、モンゴル文字では字形の上で区別されない子音字 <t> と <d>、子音字 <k> と <g>、語頭の子音字 <y> と <j>、語頭以外の母音字 <a> と <e> に対し、満洲文字はそれぞれ別

の文字を当てて書き分けている。例（右側はモンゴル文語形）：

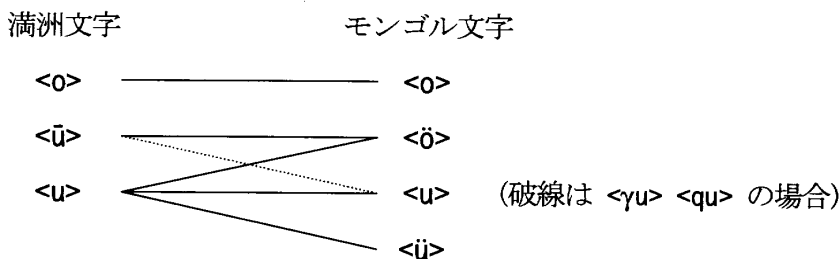
ᠠᠯᠲᠤ (alta 「金」 14-71b12) — ᠠᠯᠲᠤ (alta)、ᠠᠯᠳᠤ (alda 「尋（ひろ）」 16-43a10) — ᠠᠯᠳᠤ (alda)、
ᠬᠡᠷᠡᠭ (kerek 「用事」 2-39a4) — ᠬᠡᠷᠡᠭ (kereg)、ᠭᠡᠷᠡᠯ (gereᠯ 「光」 1-2b10) — ᠭᠡᠷᠡᠯ (gereᠯ)、
ᠶᠠᠰᠤ (yasu 「骨」 3-28b12) — ᠶᠠᠰᠤ (yasu)、ᠵᠠᠰᠠᠭ (jasak 「政治」 2-31b10) — ᠵᠠᠰᠠᠭ (jasay)、
ᠨᠠᠷᠠᠨ (naran 「太陽」 1-2b8) — ᠨᠠᠷᠠᠨ (naran)、ᠨᠡᠷᠡ (nere 「名前」 7-26a12) — ᠨᠡᠷᠡ (ner_e)、等。

(2) モンゴル文字の子音字 <q> に対して満洲文字の子音字 <h> が対応し、モンゴル文字の子音字 <k> に対して満洲文字の子音字 <k> が対応している。例（右側はモンゴル文語形）：

ᠬᠠᠭᠠᠨ (hagan 「皇帝」 2-1b8) — ᠬᠠᠭᠠᠨ (qayan)、ᠬᠣᠲᠠ (hota 「城市」 13-29a2) — ᠬᠣᠲᠠ (qota)、
ᠬᠦᠷᠠᠯ (hūral 「集会」 3-4b12) — ᠬᠦᠷᠠᠯ (qural)、ᠠᠬᠠ (aha 「兄」 5-19a6) — ᠠᠬᠠ (aq_a)、
ᠴᠢᠬᠤᠯᠠ (cihūla 「大切な」 2-39a12) — ᠴᠢᠬᠤᠯᠠ (čiquᠯa)、ᠬᠡᠨ (ken 「誰」 12-41b12) — ᠬᠡᠨ (ken)、
ᠬᠡᠭᠡ (kuke 「青い」 1-1a12) — ᠬᠡᠭᠡ (köke)、ᠨᠠᠭᠤᠷ (nūkur 「夫」 5-18b6) — ᠨᠠᠭᠤᠷ (nökür)、等。

(3) モンゴル文字の4つの母音字 <o> <u> <ö> <ü> に対して満洲文字の3つの母音字 <o> <u> <ü> が対応しているが、対応関係は概略的に次のようにまとめることができる（注14）：

- ・満洲文字の <o> は、多くの場合モンゴル文字の <o> に対応している。
 - ・満洲文字の <ü> は、多くの場合モンゴル文字の <ö>、および <yu> <qu> の <u> に対応している。
 - ・満洲文字の <u> は、モンゴル文字の <ü> <ö>、および <yu> <qu> 以外の <u> に対応している。
- これらの対応関係を図で示せば、次のようになる。



これらは、多くの事例が見出されるものであって、数は多くないが他の対応も存在する。

(4) モンゴル文字の音節末・語末の子音字 <y> (ᠶ ᠨ) と <g> (ᠭ ᠨ) に対して、満洲文字の ᠬ <k> と ᠭ <k> が対応している。例：

ᠠᠬᠲᠤ (akta 「去勢馬」 4-98a10) — ᠠᠶᠲᠤ (ayta)、ᠪᠣᠬᠳᠠ (bokda 「聖なる」 2-2b8) — ᠪᠣᠶᠳᠠ (boyda)、
ᠨᠤᠲᠤᠬ (nutuk 「郷里」 13-32a12) — ᠨᠤᠲᠤᠭ (nutuy)、ᠵᠠᠭ (juk 「方向」 1-95a4) — ᠵᠠᠭ (jüg)、
ᠤᠬᠤᠶᠤ (ukyu 「トルコ石」 14-74b12) — ᠣᠭᠶᠤ (ogyu)、ᠴᠢᠭᠢᠭ (cigik 「湿気」 12-31a2) — ᠴᠢᠭᠢᠭ (čigig)、
ᠬᠠᠭᠢᠮᠤᠢ (kukjimui 「発展する」 14-83a2) — ᠬᠠᠭᠢᠮᠤᠢ (kögji-müi)、等。

(5) 名詞類に付く格語尾は、大方はモンゴル文語の格語尾に対応しているが、属格語尾や対格語尾のように独自の読み方が示されているものもある。母音調和による交替形がないのは、語尾を強調する読み方を反映しているものであろう。次に、格語尾の形と例を示す（注15）。

属格語尾

- ・ **ᠡᠨ** (yen) : 母音字に終わる語幹につく。母音調和による交替形はない。
 ᠲᠡᠩᠭᠡᠷᠢ ᠡᠨ (tenggeri yen 「天の」 1-1a12)、ᠠᠶᠤᠩᠭᠠ ᠡᠨ (ayungga yen 「雷の」 1-12b2)、
 ᠪᠡᠶᠡ ᠡᠨ (beye yen 「身体の」 1-28b4)、ᠮᠠᠷᠭᠠᠲᠠ ᠡᠨ (margata yen 「明日の」 1-43a4)、
 ᠤᠳᠡᠰᠢ ᠡᠨ (udesi yen 「晩の」 1-44a10)、等。
- ・ **ᠨᠠ** (nu) : 子音字 **ᠨ** <n> に終わる語幹につく。
 ᠨᠠᠷᠠᠨ ᠨᠠ (naran nu 「太陽の」 1-3a8)、ᠰᠠᠷᠠᠨ ᠨᠠ (saran nu 「月の」 1-3b4)、
 ᠣᠳᠣᠨ ᠨᠠ (odon nu 「星を」 1-7a6)、ᠡᠭᠦᠯᠡᠨ ᠨᠠ (egulen nu 「雲の」 1-12b12)、
 ᠠᠭᠤᠯᠠᠨ ᠨᠠ (agūlan nu 「山の」 1-65b2)、ᠬᠤᠮᠤᠨ ᠨᠠ (kumun nu 「人の」 1-3a2)、
 ᠬᠤᠪᠡᠭᠤᠨ ᠨᠠ (kubegun nu 「子供の」 5-21a4)、等。
- ・ **ᠭᠡᠨ** (gun) : 子音字 **ᠭ** <ng> に終わる語幹につく。
 ᠲᠠᠷᠢᠶᠠᠯᠠᠩ ᠭᠡᠨ (tariyalang gun 「田畑の」 1-81a2)、ᠵᠣᠪᠠᠯᠠᠩ ᠭᠡᠨ (jobalang gun 「苦悩の」 3-27a2)、
 ᠣᠯᠣᠩ ᠭᠡᠨ (olong gun 「(馬の) 腹帯の」 4-99b4)、ᠬᠤᠷᠢᠶᠡᠯᠡᠩ ᠭᠡᠨ (kuriyeleng gun 「園の」 5-7b4)、
 ᠬᠤᠪᠦᠭ ᠭᠡᠨ (kubung gun 「綿の」 15-9a10)、等。
- ・ **ᠠᠨ** (un) : **ᠨ** <n> **ᠭ** <ng> 以外の子音字に終わる語幹につく。語幹に連ねて書かれる。
 ᠶᠠᠪᠤᠳᠠᠯ (yabudal 「行い」) — ᠶᠠᠪᠤᠳᠠᠯᠠᠨ (yabudalun 「行いの」 6-50a8)、
 ᠪᠢᠴᠢᠬ (bicik 「文書」) — ᠪᠢᠴᠢᠭᠡᠨ (bicigun 「文書の」 2-19a12)、
 ᠭᠠᠵᠠᠷ (gajar 「土地」) — ᠭᠠᠵᠠᠷᠠᠨ (gajarun 「土地の」 1-6b12)、等。

与位格語尾

- ・ **ᠲᠤᠷ** (tur) : 子音字 **ᠬ** <k> **ᠬ** <k> **ᠲ** <t> **ᠰ** <s> **ᠷ** <r> **ᠪ** に終わる語幹につく。
 ᠪᠢᠴᠢᠬ ᠲᠤᠷ (bicik tur 「文書に」 12-57a10)、ᠴᠠᠬ ᠲᠤᠷ (cak tur 「時に」 1-19b6)、
 ᠲᠤᠰᠢᠮᠡᠲ ᠲᠤᠷ (tusimet tur 「官吏らに」 2-10b4)、ᠤᠯᠤᠰ ᠲᠤᠷ (ulus tur 「国に」 2-4a12)、
 ᠭᠠᠵᠠᠷ ᠲᠤᠷ (gajar tur 「土地に」 1-2b10)、ᠬᠡᠪ ᠲᠤᠷ (keb tur 「型に」 13-24a4)、等。
- ・ **ᠳᠤᠷ** (dur) : 母音字および子音字 **ᠬ** <k> **ᠬ** <k> **ᠨ** <n> **ᠭ** <ng> に終わる語幹につく。
 ᠬᠠᠳᠠ ᠳᠤᠷ (hada dur 「岩山に」 1-72a8)、ᠬᠡᠭᠡᠷᠡ ᠳᠤᠷ (kegere dur 「野原に」 1-56a12)、
 ᠳᠠᠯᠠᠢ ᠳᠤᠷ (dalai dur 「海に」 3-102a8)、ᠡᠷᠡᠭᠡ ᠳᠤᠷ (ereo dur 「下顎に」 5-59b4)、
 ᠨᠢᠳᠤᠨ ᠳᠤᠷ (nidun dur 「目に」 1-2b12)、ᠭᠡᠷᠡᠯ ᠳᠤᠷ (gereᠯ dur 「光に」 1-3a6)、
 ᠭᠠᠩ ᠳᠤᠷ (gang dur 「日照りに」 1-37b2)、ᠵᠠᠮ ᠳᠤᠷ (jam dur 「道に」 2-16a8)、等。

対格語尾

- ・ **ᠭᠢ** (gi) : 母音字および子音字 **ᠬ** <k> **ᠬ** <k> **ᠨ** <n> **ᠭ** <ng> に終わる語幹につく。
 ᠶᠠᠭᠤᠮᠠ ᠭᠢ (yagūma gi 「物を」 1-1a8)、ᠡᠬᠡ ᠭᠢ (eke gi 「母を」 2-6b2)、
 ᠨᠡᠷᠡ ᠭᠢ (nere gi 「名を」 3-58a4)、ᠠᠬᠤᠢ ᠭᠢ (ahūi gi 「在ることを」 1-97b10)、
 ᠰᠢᠷᠣᠢ ᠭᠢ (siroi gi 「土を」 1-27a10)、ᠪᠢᠴᠢᠬ ᠭᠢ (bicik gi 「文書を」 2-9a2)、

ᠠᠵᠢᠭᠢ ᠭᠢ (kerek gi 「事を」 1-28b10)、ᠵᠠᠷᠯᠢᠭᠢ ᠭᠢ (jarlik gi 「勅旨を」 2-2a12)、
ᠵᠠᠭᠢ ᠭᠢ (jang gi 「習慣を」 2-35b4)、ᠭᠠᠰᠠᠯᠠᠩᠭᠢ ᠭᠢ (gasalang gi 「嘆きを」 2-96a8)、
ᠬᠤᠷᠢᠶᠡᠯᠡᠩᠭᠢ ᠭᠢ (kuriyeleng gi 「園を」 5-7b4)、等。

・ **ᠨᠢ (ni)** : 子音字 <n>に終わる語幹につく。

ᠰᠠᠷᠠᠨ ᠨᠢ (saran ni 「月を」 1-6a10)、ᠣᠳᠣᠨ ᠨᠢ (odon ni 「星を」 1-7b6)、
ᠤᠰᠤᠨ ᠨᠢ (usun ni 「水を」 1-14a4)、ᠰᠢᠪᠠᠭᠤᠨ ᠨᠢ (sibagūn ni 「鳥を」 1-62b6)、
ᠬᠤᠮᠤᠨ ᠨᠢ (kumun ni 「人を」 1-35b8)、ᠴᠢᠯᠠᠭᠤᠨ ᠨᠢ (cilagūn ni 「石を」 1-69b2)、等。

・ **ᠢ (i)** : <k>、<g>、<ng>、<n> 以外の子音字に終わる語幹につく。語幹に連ねて書かれる。

ᠭᠣᠣᠯᠢ (gool 「河」) — ᠭᠣᠣᠯᠢ (gooli 「河を」 1-2b4)、
ᠭᠠᠵᠠᠷ (gajar 「土地」) — ᠭᠠᠵᠠᠷᠢ (gajari 「土地を」 1-2b6)、
ᠤᠷᠢᠳᠢ (urit 「前」) — ᠤᠷᠢᠳᠢ (uridi 「前を」 1-28b4)、
ᠵᠠᠮ (jam 「道」) — ᠵᠠᠮᠢ (jami 「道を」 1-72a4)、
ᠤᠯᠤᠰ (ulus 「国」) — ᠤᠯᠤᠰᠢ (ulusi 「国を」 2-1b8)、
ᠲᠤᠯᠤᠪ (tulub 「様子」) — ᠲᠤᠯᠤᠪᠢ (tulubi 「様子を」 1-20b6)、等。

尊格語尾

・ **ᠡᠴᠡ (ece)** : すべての語幹につく。母音調和による交替形はない。

ᠵᠢᠮᠢᠰ ᠡᠴᠡ (jimis ece 「果実から」 19-43a10)、ᠴᠢᠴᠢᠭ ᠡᠴᠡ (cicik ece 「花から」 19-49b8)、
ᠰᠠᠷᠠ ᠡᠴᠡ (sara ece 「月から」 1-35a6)、ᠵᠠᠪᠰᠠᠷ ᠡᠴᠡ (jabsar ece 「隙間から」 1-4a10)、
ᠭᠠᠵᠠᠷ ᠡᠴᠡ (gajar ece 「土地から」 1-9a4)、等。

造格語尾

・ **ᠪᠡᠷ (ber)** : 母音字に終わる語幹につく。母音調和による交替形はない。

ᠨᠢᠳᠦᠷᠭᠠ ᠪᠡᠷ (nidurga ber 「拳で」 2-66b2)、ᠰᠢᠳᠤ ᠪᠡᠷ (sidu ber 「歯で」 5-73b10)、
ᠲᠣᠯᠣᠭᠠᠢ ᠪᠡᠷ (tologai ber 「頭で」 2-70b6)、ᠤᠭᠡ ᠪᠡᠷ (uge ber 「言葉で」 2-94a2)、
ᠰᠠᠪᠬᠠ ᠪᠡᠷ (sabha ber 「箸で」 3-18a10)、等。

この語尾は、ᠨᠢᠳᠦᠪᠡᠷ (niduber 「目で」 1-2b6)のように語幹と連ねて書かれることがある。

・ **ᠶᠡᠷ (iyer)** : 子音字に終わる語幹につく。母音調和による交替形はない。

ᠰᠢᠨᠡᠲ ᠶᠡᠷ (sinet iyer 「初旬に」 1-38b10)、ᠴᠠᠭ ᠶᠡᠷ (cak iyer 「時間で」 1-45b2)、
ᠬᠠᠭᠤᠴᠢᠲ ᠶᠡᠷ (hagūcit iyer 「下旬に」 1-39a2)、ᠭᠠᠵᠠᠷ ᠶᠡᠷ (gajar iyer 「土地で」 1-63b10)、
ᠬᠤᠴᠤᠨ ᠶᠡᠷ (kucun iyer 「力で」 1-87a2)、等。

連合格語尾

本文中には ᠬᠤᠮᠤᠨ ᠤᠯᠦᠭᠡ (kumun luge 「人と」 2-51a2, 10-14b8) という形が2例あるのみであるが、
序文には ᠴᠠᠭ ᠤᠯᠦᠭᠠ (cak luga 「時間と」) という形があり、母音調和により ᠤᠯᠦᠭᠠ (luga) と
ᠤᠯᠦᠭᠡ (luge) という形が使い分けられている。

(6) 若干の語では単純な文字の置き換えでない次のような表記も見られる。

ᠲᠡᠩᠭᠡᠷᠢ (tenggeri 「天」 1-1a8) — ᠲᠠᠩᠭᠢ (tngri)、ᠤᠵᠤᠭ (ujuk 「文字」 3-63a6) — ᠤᠰᠦᠭ (üsüg)、
ᠳᠡᠷᠪᠡᠨ (derben 「四」 3-81a8) — ᠳᠣᠷᠪᠡᠨ (dörben)、ᠳᠡᠴᠢᠨ (decin 「四十」 3-83a8) — ᠳᠣᠴᠢᠨ (döčin)、
ᠢᠰᠤᠨ (isun 「九」 3-82b2) — ᠶᠢᠰᠦᠨ (yisün)、ᠢᠷᠡᠨ (iren 「九十」 3-83b6) — ᠶᠡᠷᠡᠨ (yeren)、
ᠴᠢᠴᠢᠭ (cicik 「花」 19-47a6) — ᠴᠡᠴᠡᠭ (čečeg)、等。

(7) また、口語の露出形と見られるものも存在するが、先行する満蒙清文鑑のモンゴル語の形を踏襲したものが多い（2. の(6)の例を参照）。

ᠬᠠᠵᠠᠣ (hajao 「傍ら」 1-96a2)、ᠨᠡᠮᠤᠢ (neomui 「放浪する」 10-9a4)、
ᠵᠡᠣ (jeo 「針」 14-65b4)、ᠨᠢᠰᠤ ᠨᠢᠮᠤᠢ (nisu nimui 「鼻をかむ」 5-85b4)、
ᠳᠡᠭᠦᠷ (degur 「外面」 9-54b4)、ᠴᠠᠳᠤ (cadu 「あちら」 1-97b2)、ᠲᠣᠭᠣ (togo 「鍋」 16-11b8)、
ᠪᠤᠮ (bum 「塊」 1-57b8)、ᠠᠯᠴᠣᠷ (alcor 「手巾」 15-61b2)、ᠬᠡᠳᠠᠭᠠ (hūtaga 「小刀」 4-64a6)、
ᠨᠦᠷᠤ (nuru 「腰」 5-66b10)、ᠵᠤᠲᠦᠭᠤᠮᠤᠢ (jutkumui 「努める」 12-23b8)、等。

本清文鑑の影印資料としては、次のものが公刊されている。

・『御制満蒙文鑑』（故宮珍本叢刊 720-721）海南出版社、2001.

4. 『御製増訂清文鑑』

乾隆 36 年（1771 年）の序をもつ本清文鑑は、満洲語と漢語との対訳辞典であるが、それと同時に満洲語による語釈と並んで、満洲語と漢語の発音情報をも含んだ極めて多機能な清文鑑である。

（図 5.）満洲語の表題は han i araha nonggime toktobuha manju gisun i buleku bithe（皇帝の作った増加し定めた満洲語の辞書）である。全体の構成は、正編 32 巻、正編の総綱 8 巻、補編 4 巻、補編の総綱 2 巻。別に「御製清文鑑」の序、本書の序、十二字頭表各 1 巻からなっている。

本清文鑑の特徴として第 1 に指摘するべきは、本清文鑑の表題に示されているように、収録語数が大幅に「増訂」されていることである。

見出し語の数は 18,654 項目となったが、これは先行する 3 種類の清文鑑の見出し語数 12,110 より 6,544 項目増加し、全体で約 1.5 倍となっている。これに関連して、正編（32 巻）では分類体系が 280 類から 292 類に増加し、見出し語は 17,035 項目、補編（4 巻）では 26 類 1,619 項目が収録されている。

この分類体系と収録語彙は、その後の清文鑑、とくに『四体清文鑑』および『五体清文鑑』にはほぼそのままの形で継承された。違いがあるのは、僅かに 20 項目程度の収録語彙の異同に過ぎない。収録語彙の違いは、本清文鑑になくて、『五体清文鑑』に収録されている見出し語は 19 項目、逆に本清文鑑にあって『五体清文鑑』にない見出し語が 2 項目あり、全体として本清文鑑の収録語彙数は『五体清文鑑』と比較して 17 項目少ない。この他、満洲語の見出し語が互いに異なるものが 2 項目見られる。

「天理図書館所蔵満語文献集 語学編」(マイクロフィルム、雄松堂、1966)より

収録語彙の大幅な増訂に加えて、本清文鑑のもうひとつの特色となっているのが満洲語と漢語訳に発音が示されていることである。満洲語の発音は漢字で、漢語の発音は満洲文字で表記されている。このうち、満洲語の発音を示す漢字の表記方法は「三合切音」という独特の方式によっている。

図6. は、本清文鑑に付されている「十二字頭」と呼ばれる満洲語の音節表の一部であるが、それぞれの音節を示す満洲文字の右脇に発音を示す漢字が置かれている。図6. は、左側から縦に

an en in, on un ūn, nan nen nin,
non nun nūn, kan gan han, kon gon hon,
kūn gūn hūn, ban ben bin, bon bun būn,
...

という音節であり、これが最大3個の漢字の組み合わせによって表記されているのが「三合切音」漢字表記である。基本的には、母音1つからなる音節は漢字1字で、母音1つと子音1つからなる音節（「子音+母音」または「母音」+「子音」）は漢字2字で、子音2つと母音1つからなる音節（「子音+母音+子音」）は漢字3つで表記するやり方である。

本清文鑑にはモンゴル語は含まれていないが、「三合切音」漢字表記の方式はこれに続く満蒙漢3言語対訳の『三合切音清文鑑』に継承されることになる。

本清文鑑の影印として、次のものが公刊されている：

- ・『御製増訂清文鑑』（マイクロフィルム）「天理図書館所蔵満語文献集 語学編」雄松堂、1966.

本清文鑑は、欽定四庫全書（経部十小学類二字書之属）に収録されているので、次のようにその復刻本を利用することができる。

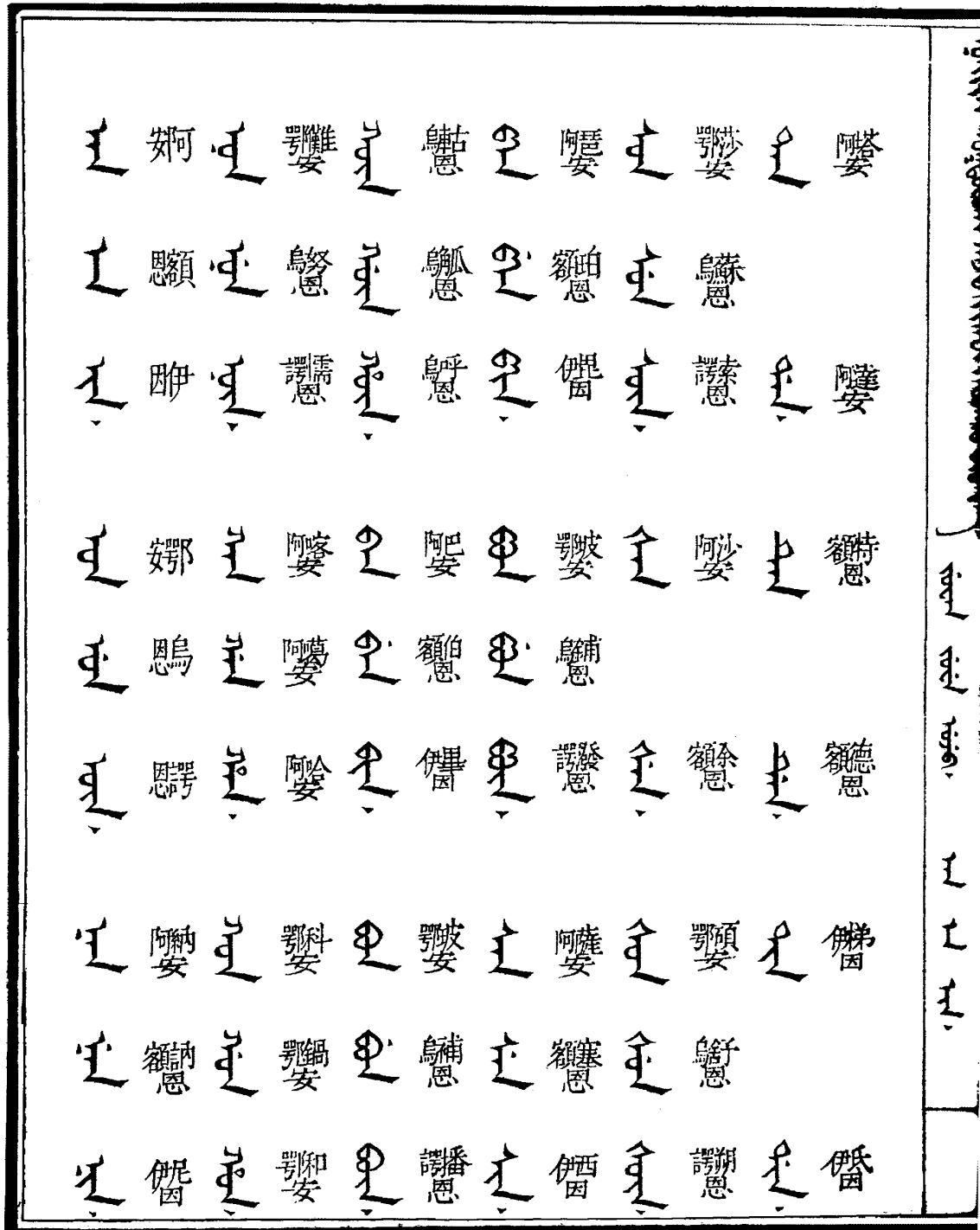
- ・『御製増訂清文鑑 一、二』「四庫全書 232, 233」、上海古籍出版社、1987.
- ・欽定四庫全書薈要『御製増訂清文鑑 一、二』吉林出版集团有限责任公司、2005.

なお、『清代中国語 満洲語辞典』（中嶋幹起編、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、1999）は、中嶋〔1993～1999〕の全9冊を1巻にまとめた全2,166頁に及ぶ大著で、『御製増訂清文鑑』の全項目について、漢語のピンイン表記、漢字表記、満洲文字発音表記のローマ字転写と、満洲語の見出し語と語釈のローマ字転写を行い、現代中国語（漢語）と満洲語の索引を付したものである。

5. 『御製満珠蒙古漢字三合切音清文鑑』

乾隆45（1780）年の序をもつ本清文鑑は、満洲語の題名を *han i araha manju monggo nikan hergen ilan hacin i mudan acaha buleku bithe*（皇帝の作った満洲文字・モンゴル文字・漢字3種の音を合わせた辞書）として、満洲語、モンゴル語、漢語の3言語の発音辞典であることを示している。モンゴル語の題名は *qayan-u biči=gsen manju mongyul kitad üsüg yurban jüil-ün ayalu neyile=gsen toli bičig* となっている。

図6. 『増訂清文鑑』の満洲語十二字頭および三合切音漢字表記（一部）



『増訂清文鑑』（「天理図書館所蔵満語文献集 語学編」）より

図7. 『御製滿珠蒙古漢字三合切音清文鑑』本文第1巻第2丁表

<p>阿補喀 ᠠᠪᠤᠬᠠ</p>	<p>特斡額哩 ᠲᠡᠬᠡᠨᠡᠭᠡᠯᠢ</p>	<p>天 ᠲᠠᠨ</p>	<p>儼優鄂安 ᠶᠡᠨᠠᠭᠤᠨᠠᠨ</p>	<p>枯珂額 ᠬᠤᠬᠣᠨᠡ</p>	<p>蒼天 ᠴᠠᠩᠲᠠᠨ</p>
<p>阿布喀 ᠠᠪᠤᠬᠠ</p>	<p>滕歌哩 ᠲᠡᠩᠭᠡᠯᠢ</p>	<p>阿補喀 ᠠᠪᠤᠬᠠ</p>	<p>鈕歡阿布喀 ᠨᠡᠬᠤᠨᠠᠪᠤᠬᠠ</p>	<p>枯珂滕歌哩 ᠬᠤᠬᠣᠨᠲᠡᠩᠭᠡᠯᠢ</p>	<p>青天 ᠴᠢᠩᠲᠠᠨ</p>
<p>德爾基 ᠳᠡᠯᠦᠭᠢ</p>	<p>德歌都 ᠳᠡᠭᠠᠳᠤ</p>	<p>上天 ᠤᠰᠤᠲᠠᠨ</p>	<p>歌歌根 ᠭᠠᠭᠠᠭᠠᠨ</p>	<p>歌歌根 ᠭᠠᠭᠠᠭᠠᠨ</p>	<p>青天 ᠴᠢᠩᠲᠠᠨ</p>
<p>阿補喀 ᠠᠪᠤᠬᠠ</p>	<p>特斡額哩 ᠲᠡᠬᠡᠨᠡᠭᠡᠯᠢ</p>	<p>阿補喀 ᠠᠪᠤᠬᠠ</p>	<p>廣音阿布喀 ᠭᠤᠩᠠᠪᠤᠬᠠ</p>	<p>歌歌根滕歌哩 ᠭᠠᠭᠠᠭᠠᠨᠲᠡᠩᠭᠡᠯᠢ</p>	<p>青天 ᠴᠢᠩᠲᠠᠨ</p>

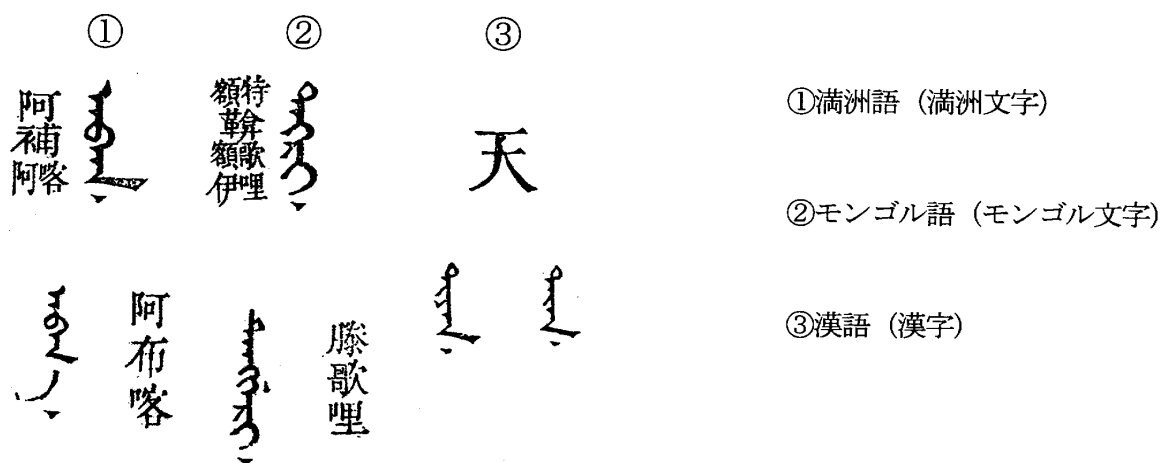
東洋文庫所蔵本

巻の構成は、本文が31巻。別に序（御製序と御製増訂清文鑑の序。いずれも満・蒙・漢）、凡例（漢語のみ）、編者名・職名表（満洲語のみ）、目録（満・蒙・漢）が1巻にまとめられ、合わせて32巻となっている。「総綱」は無い。

見出し語の数は13,835項目であり、「満蒙清文鑑」より1,725項目増えているが、それ以前に刊行された『増訂清文鑑』より4,819項目少ない。見出し語の分類体系は36部289類で、「満蒙清文鑑」の280類より多いが、『増訂清文鑑』の292類よりは少なく、両者の中間的な位置にある。

本清文鑑の特徴は、何よりも、収録見出し語の発音情報が豊富な点にある。

図7. は、本清文鑑の本文第1巻第2丁表の影印であり、下はその1番目の項目である。そこに記されているのは、左から順に①満洲語（満洲文字）、②モンゴル語（モンゴル文字）、③漢語（漢字）で、それぞれに2～3種類の発音表記が添えられている。



①～③のそれぞれの言語に付されている発音表記は次の通りである。

左	①	左	②	③	
左下	右下	左下	右下	左下	右下

①満洲語に対して：

左側：漢字（三合切音方式）による発音表記

左下：モンゴル文字による発音表記

右下：漢字による発音表記

②モンゴル語に対して：

左側：漢字（三合切音方式）による発音表記

左下：満洲文字による発音表記

右下：漢字による発音表記

③漢語に対して：

左下：満洲文字による発音表記

右下：モンゴル文字による発音表記

全巻に収録されている13,835項目は、すべてこれら11の部分によって構成されている。

このように、本清文鑑ではモンゴル語に対して3種類の発音情報が与えられているが、それらの性格については十分な検討と評価を行う必要がある。

まず、満洲文字によるモンゴル語の発音表記についてみると、本稿の3. の(1)～(7)にまとめた特徴がそのまま本清文鑑の満洲語表記についてもあてはまることから、本清文鑑は乾隆8(1743)年序の「御製満蒙文鑑」の表記をそのまま踏襲していると思えることができる。本清文鑑に独自の情報としては、「御製満蒙文鑑」に無い語彙、つまり見出し語で置き換えられたり、新たに追加された語彙に関するものである。

次に、漢字の「三合切音」方式によるモンゴル語の発音表記に関してみると、これはモンゴル語の音節を「子音+母音+子音」に分解して漢語に無い音を表す独特の工夫であり、一見したところ極めて精細かつ厳密な発音表記の様相を呈している。これは、漢語に無いモンゴル語の音を特別な漢字の組み合わせで表記した『元朝秘史』や『華夷訳語』(甲種本)の漢字音訳方式を思わせるものがある。しかし、本清文鑑における漢字の「三合切音」方式によるモンゴル語表記を満洲文字によるモンゴル語表記と比較した場合、満洲文字の表記以上の発音情報を見出すことは困難である。換言すれば、満洲文字で区別されているところは漢字でも区別されており、満洲文字で区別されないものは漢字でも区別されておらず、記されている発音情報は等価であるとみなされる。

漢字と満洲文字では表記体系が大きく異なるにもかかわらず、表記内容がまったく同じというのは、どのように理解するべきであろうか？ひとつには、もとのモンゴル語の発音が同じであるために、表記する文字や表記方法が変わっても表記内容は変わらないという考え方もあり得る。しかし、ここでは、むしろ表記内容を人為的に統一している可能性があることを指摘しておきたい。つまり、漢字の「三合切音」方式によるモンゴル語表記は、モンゴル語の発音(あるいは読み方)を直接聞き取って表記したものではなく、すでに存在している満洲文字表記を機械的に置き換えて作られたと考えると、両者の合致に納得がいく。

満洲文字から漢字の「三合切音」方式に置き換えるための「変換テーブル」として考えられるのが、図6. で見た『増訂清文鑑』の満洲語十二字頭の三合切音漢字表記である。本清文鑑の満洲文字によるモンゴル語表記が「御製満蒙文鑑」の満洲文字表記をそのまま踏襲していることは、上に見たとおりである。その満洲文字表記を満洲語十二字頭表の三合切音表記に従って変換したものが、すなわち本清文鑑におけるモンゴル語の「漢字三合切音表記」であると考えられる。

このように考えると、本清文鑑に独自の表記はむしろ他方の(三合切音方式でない)漢字表記だということができる。

本清文鑑の影印としては、次のものが公刊されている：

- ・『御製満珠蒙古漢字三合切音清文鑑』(マイクロフィルム)「天理図書館所蔵満語文献集 語学編」、雄松堂、1966.

これには、次のような乱丁が認められる(注16)：

御製序の 11-18 丁と御製増訂清文鑑序の 11-19 丁がそっくり入れ替わっている。

第 5 巻の第 45 丁と第 10 巻の第 45 丁が入れ替わっている。

このほか、本清文鑑は欽定四庫全書に収録されており（経部十小学類二字書之属）、復刻本を利用することができる。

なお、『御製満珠蒙古漢字三合切音清文鑑』モンゴル語配列対照語彙』（栗林均・呼日勒巴特尔編、東北大学東北アジア研究センター、2006）は、本清文鑑のモンゴル語のローマ字転写を見出し語としてアルファベット順に配列したものである。モンゴル語の見出し語の後には、モンゴル語の満洲文字表記（ローマ字転写）、モンゴル語（モンゴル文字）、漢語、満洲語（ローマ字転写）の順に並び、原本における出現位置と分類項目、『五体清文鑑』における出現位置を付している。

本清文鑑のモンゴル語の言語的な特徴については、同書の「前書き」にまとめているので、ここでは繰り返さない（注 17）。また、呼日勒巴特尔 [2004] は本清文鑑のモンゴル語の表記方式と言語的な特徴を専門に論じている。

6. 『御製四体清文鑑』

本清文鑑は満洲語、チベット語、モンゴル語、漢語の 4 言語対訳清文鑑である。殿版の木版本であるが、序文は無く、刊行年は不詳である。満洲語の題名は *han i araha duin hacin i hergen kamciha manju gisun i buleku bithe*（皇帝の作った 4 種類の文字を合わせた満洲語の辞書）で、モンゴル語訳は *qayan-u biči=gsen dörben jüil-ün üsüg-iyer qabsur=u=γsan manju ügen-ü toli bičig* となっている。序・総綱は無く、目録と本文のみから成る。本文の構成は、正編 32 巻、補編 4 巻。見出し語の数は全 18,667 項目であり、これは『五体清文鑑』より 4 項目少ない。これらは、『増訂清文鑑』および『五体清文鑑』と同じく 36 部 292 類に分類されている。

本清文鑑にはなくて、『五体清文鑑』にあるものは次の 4 項目である（注 18）：

第 9 巻武功部 2 畋獵類 3 の *fenfuliyer tuheke*（「獸中傷口著地倒狀」蒙：*türügüle+ber una=bai*）

第 16 巻人部 7 疼痛類 2 の *holhon gocimbumbi*（「腿肚轉筋」蒙：*šaγantu tata=mui*）

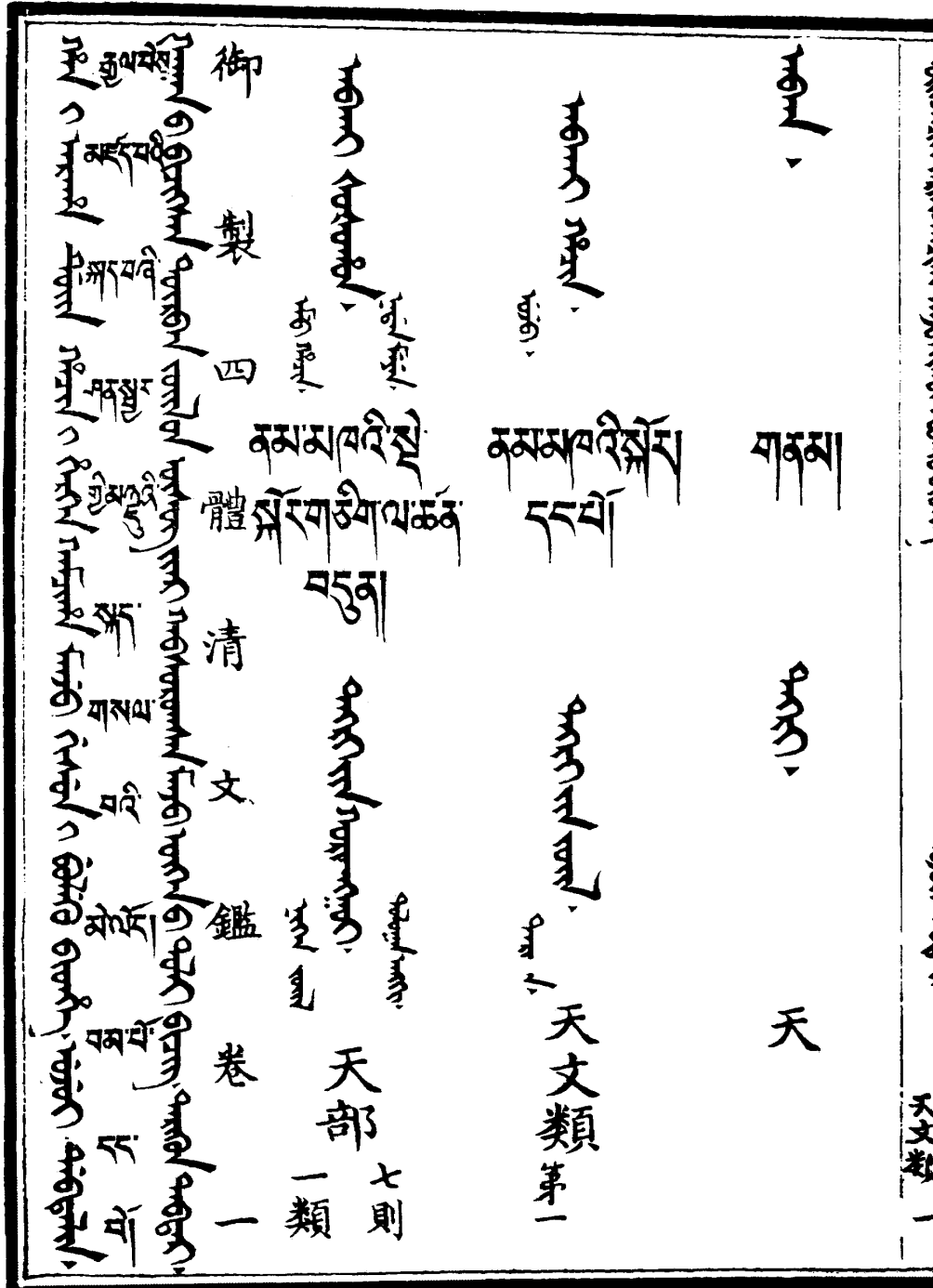
第 22 巻産業部 打牲器用類 3 の *horhotu*（「打虎豹大木籠」蒙：*qorquγur*）

第 31 巻獸部 獸類 3 の *šolonggo mafuta*（「二歳鹿」、蒙：*šumayai dayir*）

本文は、1 行に満洲語、チベット語、モンゴル語、漢語が並んでいる（図 8. を参照）。1 行に 1 項目が並ぶ体裁は、『五体清文鑑』と同じであるが、五体清文鑑ではチベット語（とウイグル語）に満洲文字による発音表記が付されているのに対し、本清文鑑には発音情報は含まれていない。これ以外は、語彙項目も分類体系も配列方法も『五体清文鑑』と同じである。

モンゴル語資料としての本清文鑑の価値は、チベット語の訳語が加わっていることと、語彙数が『御製満珠蒙古漢字三合切音清文鑑』より 4,836 語増加していることである。今西 [1966 : 144] によれば、満洲語は誤刻が多く未校了のまま刊行されたものであろうという。モンゴル語については

図8. 『御製四体清文鑑』本文第1巻第1丁表



「天理図書館所蔵満語文献集 語学編」(マイクロフィルム、雄松堂、1966)より

今後詳細な調査が必要であるが、後述するように『五体清文鑑』（北京本、奉天本）においても、モンゴル語の誤記は少なくないため、モンゴル語を校訂する上で本清文鑑を利用することは有益である。特に『御製満珠蒙古漢字三合切音清文鑑』に載録されていない語彙については、本清文鑑と『五体清文鑑』を比較・対照する意義は大きい。

本清文鑑の影印資料としては、次のマイクロフィルムが公刊されている。

- ・『御製四体清文鑑』（マイクロフィルム）「天理図書館所蔵満語文献集 語学編」、雄松堂、1966.

これには、第12巻の最初の40丁くらいまで版面の一部に墨痕があり、特にモンゴル語の部分が一部判読困難となっている。

7. 『御製五体清文鑑』

本清文鑑は、満洲語、チベット語、モンゴル語、ウイグル語、漢語の5言語対訳辞典である。序、凡例、総綱はなく、目録と本文正編32巻、補編4巻から成っている。本稿で見た他の清文鑑はすべて木版印刷本であるのに対し、本清文鑑は写本のみである。序はなく、編纂・制作年は不詳である。満洲語の題名は *han i araha sunja hacin i hergen kamciha manju gisun i buleku bithe*（皇帝の作った5種類の文字を合わせた満洲語の辞書）で、モンゴル語訳は、*qayan-u biči-gsen tabun jüil-ün üsüg-iyer qabsur-u-ysan manju ügen-ü toli bičig* となっている。見出し語の総数は18,671項目、分類体系は『増訂清文鑑』および『四体清文鑑』と同様36部292類である。

本文は、満洲語、チベット語訳、モンゴル語訳、ウイグル語訳、漢語訳を1行に並べている点は『四体清文鑑』と同じであるが、チベット語とウイグル語には、満洲文字によって発音表記が付され、このうちチベット語には文語と口語の2種類の発音が付されている（図9.を参照）。

今西[1966: 160-161]によれば、『御製五体清文鑑』の写本は北京故宫博物院に2本、大英博物館に1本蔵されており、故宫博物院蔵のうちの1本はもともと奉天故宮に蔵されていたものである。今西氏はこれらを北京本、奉天本と呼び、大英博物館の1本をロンドン本と呼んでいる。









奉天本と北京本の影印としては、それぞれ次のものが公刊されている。

- ・『御製五体清文鑑』東洋文庫複製本、1937（注19）.
- ・『五体清文鑑（上冊・中冊・下冊）』（民族出版社、1957、1998再刊）

前者は京都大学所蔵の奉天本写真原版をもとに複製したものであるが、今西[1966: 160-161]が指摘するように、落丁・乱丁が多い。図9.は、同書本文第1巻第1丁裏の影印である。

なお、『五體清文鑑譯解（上・下巻）』（田村實造・今西春秋・佐藤長共編、京都大學文學部内陸アジア研究所、1966）は『五体清文鑑』の増補テキスト版とも呼ぶことができるものである。同書は上・下2巻からなり、上巻は奉天本に基づき、『五体清文鑑』に載録されている全18,671項目の満洲語、チベット語、モンゴル語、ウイグル語のローマ字転写と漢語の翻刻、さらに満洲語に対する日本語の訳解を付し、原本の分類配列順に並べたものである。下巻（総索引）には5言語それぞれ

図9. 『御製五体清文鑑』本文第1巻第1丁裏

			
ᠬᠡᠳᠤᠨ	ᠬᠡᠳᠤᠨ ᠬᠡᠳᠤᠨ	ᠬᠡᠳᠤᠨ ᠬᠡᠳᠤᠨ	ᠬᠡᠳᠤᠨ ᠬᠡᠳᠤᠨ
ᠬᠡᠳᠤᠨ	ᠬᠡᠳᠤᠨ ᠬᠡᠳᠤᠨ	ᠬᠡᠳᠤᠨ ᠬᠡᠳᠤᠨ	ᠬᠡᠳᠤᠨ ᠬᠡᠳᠤᠨ
			
ᠬᠡᠳᠤᠨ	ᠬᠡᠳᠤᠨ ᠬᠡᠳᠤᠨ	ᠬᠡᠳᠤᠨ ᠬᠡᠳᠤᠨ	ᠬᠡᠳᠤᠨ ᠬᠡᠳᠤᠨ
ᠬᠡᠳᠤᠨ	ᠬᠡᠳᠤᠨ ᠬᠡᠳᠤᠨ	ᠬᠡᠳᠤᠨ ᠬᠡᠳᠤᠨ	ᠬᠡᠳᠤᠨ ᠬᠡᠳᠤᠨ
天	上天	蒼天	清天

東洋文庫複製本（東北大学附属図書館所蔵）

の全項目索引（ローマ字転写はアルファベット順、漢語は画数順で検字表を付す）である。また、上巻の巻末には今西春秋氏による「五體清文鑑解題」が付されているが、今西[1966]はこれを論文として公刊したものである。

このように、同書は『五体清文鑑』を利用するに際してこの上ない便宜を得ることができるが、モンゴル語のローマ字転写に関しては、独自の方式を採用しており、利用に際しては注意が必要である。同書におけるモンゴル語のローマ字転写形は、「満洲文字による標音」つまり満洲文字によるモンゴル語の発音表記をローマ字転写したものである。しかし、図9.にみるように「満洲文字による標音」は『御製五体清文鑑』自体には含まれておらず、それらは『三合便覧』所載のもの、および京都大学所蔵の『御製四体清文鑑』の朱筆書き入れによっているという（同書「凡例」：xiii）。『三合便覧』に収録されている満洲文字表記のモンゴル語は、乾隆8（1743）年の序をもつ「滿蒙合璧清文鑑」および乾隆45（1780）年の序をもつ『御製滿珠蒙古漢字三合切音清文鑑』におけるモンゴル語の満洲文字表記と共通するところが多い。たとえば、『五體清文鑑譯解』における次のようなモンゴル語表記は、3.（7）で見たモンゴル語の満洲文字表記と共通である（注20）：

hajao「傍ら」（943）、neomui「放浪する」（7863）、jeo「針」（11612）、nisu nimui「鼻をかむ」（5022）、cadu「あちら」（956）、togo「鍋」（12882）、bum「塊」（598）、alcor「手巾」（7472）、hūtaga「小刀」（4033）、nuru「腰」（4904）、jutkumui「努める」（9472）、等。

したがって、同書のモンゴル語ローマ字転写形を利用する際には、『五体清文鑑』に存在しない「満洲文字による標音」によっていることと、その満洲文字表記の性格と制限について注意を払う必要がある。

本清文鑑は18世紀に編纂された種々の清文鑑のなかで、最も多くの言語を含み、最も多くの語彙（見出し語）を収録した、清文鑑の集大成と言うべきものである。本清文鑑のモンゴル語資料としての価値も、語彙の豊富さと対訳言語の多さにある。ただし、モンゴル語の見出し語のほとんどすべては先行する清文鑑の語彙を継承していることと、本清文鑑が写本として成立していることには、注意を払って利用する必要がある。

写本としての性質上、存在している3本は異本として校合し校訂する必要がある。今西[1966：160-161]は、満洲語について北京本は奉天本に比べて誤字誤写が多いことを指摘しているが、モンゴル語に関しても同様に思われる。たとえば、北京本（注21）の第1巻の1648-1650頁（6219-6230）、第2巻の1899-1901頁（7165-7171）、1908-1913頁（7200-7220）、3006-3009頁（11310-11322）では、満洲語や漢語等他の言語に対するモンゴル語の訳語が合致しておらず、書写の際に頁の順序や項目の順番を間違えたものと思われる。奉天本にはこれらの誤記はないが東洋文庫複製本（1937）は上述のように乱丁・落丁が多い。3種類の写本の比較と校訂が俟たれるゆえんである。

注

本稿は、2007年6月9日に新潟産業大学で開催された第14回モンゴル学術交流会における同じ題名の特別講演、および同年10月24-26日にサンクト・ペテルブルクで開催されたロシア科学アカデミー言語研究所主催の国際学術会議（Mongolian Language: Problems of Historical Development）における英文発表をもとに加筆補正したものである。

- (1) 満洲語のローマ字転写は Möllendorff [1892] 方式による。
- (2) 「ウイグル語」は、この時代にアラビア文字で書かれたチュルク系の言語を指す。江 [1969] は「チャガタイ・チュルク語」、庄垣内 [1979] は「新ウイグル語」と呼んでいる。
- (3) このほか「清文鑑」の名を冠する満洲語の辞典には、雍正 13 (1735) 年序の『音漢清文鑑』、乾隆 11 (1746) 年序の『一学三貫清文鑑』、さらに『御製兼漢清文鑑』等があるが、いずれもモンゴル語は含まれておらず、本稿では扱わない。
- (4) 今西 [1966: 130-133] は「満蒙合璧清文鑑」、江桥 [2001: 159-160] は「御制満蒙合璧清文鑑」（または「御制満洲蒙古合璧清文鑑」）、春花 [2006: 594] は「清文合蒙古鑑」と呼んでいる。春花 [2006: 594] によれば、このほか「御制満蒙文鑑」「蒙古字合刻清文鑑」「清文鑑」等の名称で言及されてきた。
- (5) モンゴル語のローマ字転写は、Pope [1954] をもとにいくつかの変更を加えた栗林均・呼日勒巴特尔 [2006: 4-5] の方式による。
- (6) 盧秀麗・閻向東 [2002: 104-105] では、「御製清文鑑二十卷」について「清康熙五十六年 (1717) 武英殿刻本 三十冊 毛装 満蒙合璧本」としている。ここに「三十冊」とあるのは、本文 20 冊、総綱 8 冊に加えて、御製序と目録を 1 冊、後序を 1 冊としたものであろうか。
- (7) 別の類で同じ語が見出し語となっている例があるので、見出し語の数がそのまま異なり語数となる訳ではない。筆者の調査では、12,110 の見出し語のうち、異なり語数は 10,849 である。
- (8) 「古典式モンゴル文語 (Classical Written Mongolian)」あるいは「古典式モンゴル語 (Classical Mongolian)」は、主に 17 世紀から 18 世紀にかけてチベット語の仏典をモンゴル語に翻訳して木版出版する際に規範化された書き言葉をさす。Grønbech and Krueger [1955: 5] によれば、これは 1720 年に行われたカンジュールの北京木版本の改訂によって最終的な形をとり、それが今日に至るまで書き言葉の規範となってきた。
- (9) 本稿では、印刷の都合上、モンゴル文字を反時計回りに 90 度回転させた形で表記する。また、<ᠢ> <j> のようにヤマカッコ (< >) でくくったものは、「文字」であることを表す。
- (10) 以下の例では、出現位置を「巻数、丁数、表裏 (ab)、行数」の順にアラビア数字とアルファベット (ab) で記し、巻数の後にハイフンを置く。たとえば、「14-73b8」は、「第 14 巻 73 丁裏の第 8 行」を表す。
- (11) 紛らわしいのは、康熙 56 年の序をもつ満蒙清文鑑と、本清文鑑を区別をつけるのが難しいことであるが、刊行年で区別するか、モンゴル語の「満洲文字表記」で区別する以外に無い。
- (12) 本清文鑑の影印本である『御制満蒙文鑑』（海南出版社、2001）二冊本に索引はない。また盧秀麗・閻向東 [2002: 106-107] には、「御製満蒙文鑑二十卷」について「清乾隆八年 (1743) 武英殿刻本 二十八冊 毛装 満蒙合璧本 50234 八冊 存《総綱》八卷」とあるが、検索番号 (50234) が異なることから、別の保管単位となっていることが分かる。
- (13) 満洲語で、母音字が連続して書かれる場合、2 番目の要素となるのは i か o に限られる。このため、同じ母音字が連続して書かれるのは、ii または oo だけである。

- (14) ここでは、満洲文字でモンゴル語を表記する際の母音字の対応の概略を示すにとどめ、詳細は稿を改めて論じたい。
- (15) 呼日勒巴特尔 [2005] は、主に『三合便覧』によって、モンゴル文語と比較しながらモンゴル語の満洲文字表記に見られる格語尾をまとめている。その表記方法はほとんど同じである。
- (16) これらは東洋文庫所蔵本も同様である。東洋文庫所蔵本にはさらに落丁がある（栗林均・呼日勒巴特尔 [2006 : 633]）。
- (17) 栗林均・呼日勒巴特尔 [2006 : v-xi]。
- (18) 今西 [1966 : 156] は『四体清文鑑』と『五体清文鑑』の語彙の違いを3語だけとしているが、実際の違いはこれら4語である。カッコ内は対応する漢語とモンゴル語。
- (19) 複製本に刊行年の記載はない。刊行年はPoppe, Hurvitz, Okada [1964 : 165] によった。
- (20) カッコ内は『五體清文鑑譯解』における項目の通し番号。『三合便覧』については今西 [1966 : 151-156] を参照。また、『三合便覧』におけるモンゴル語の満洲文字表記方法については、呼日勒巴特尔 [2006] に詳しい。
- (21) 民族出版社(1957、1998 再刊) 本による。カッコ内の数字は項目の通し番号である。

参考文献（欧文、和文、中・蒙文の順）

〔欧文〕

Grønbech, Kaare and Krueger, John R. 1955

An introduction to classical (literary) Mongolian, Otto Harrassowitz.

Möllendorff, P.G. von 1892

A Manchu Grammar, with Analyzed Texts, American Presbyterian Mission Press.

Poppe, Nicholas 1954

Grammar of Written Mongolian, Otto Harrassowitz.

Poppe, Nicholas, Hurvitz, Leon, Okada, Hidehiro 1964

Catalogue of the Manchu-Mongol Section of the Toyo Bunko, The Toyo Bunko & The University of Washington Press.

〔和文〕

石橋崇雄 1989

『han i araha manju gisun i buleku bithe, (御製清文鑑)』考一特にその語彙解釈中の出典をめぐって一 国士舘大学文学部人文学会『国士舘大学文学部人文学会紀要 別冊』第1号、67-87頁。

今西春秋 1966

「清文鑑一単体から5体まで」朝鮮学会『朝鮮学報』第39・40輯、121-163+11-1頁。

栗林均、呼日勒巴特尔（編） 2006

『「御製満珠蒙古漢字三合切音清文鑑」モンゴル語配列対照語彙』東北大学東北アジア研究センター。

江実 1969

「満州語、蒙古語、チャガタイ・チュルク語（回語）の語彙関係々係について 一五体清文鑑を基礎にして一」日本言語学会『言語研究』第54号、49-62頁。

庄垣内正弘 1979

『五体清文鑑』18世紀新ウイグル語の性格について」日本言語学会『言語研究』第75号、

